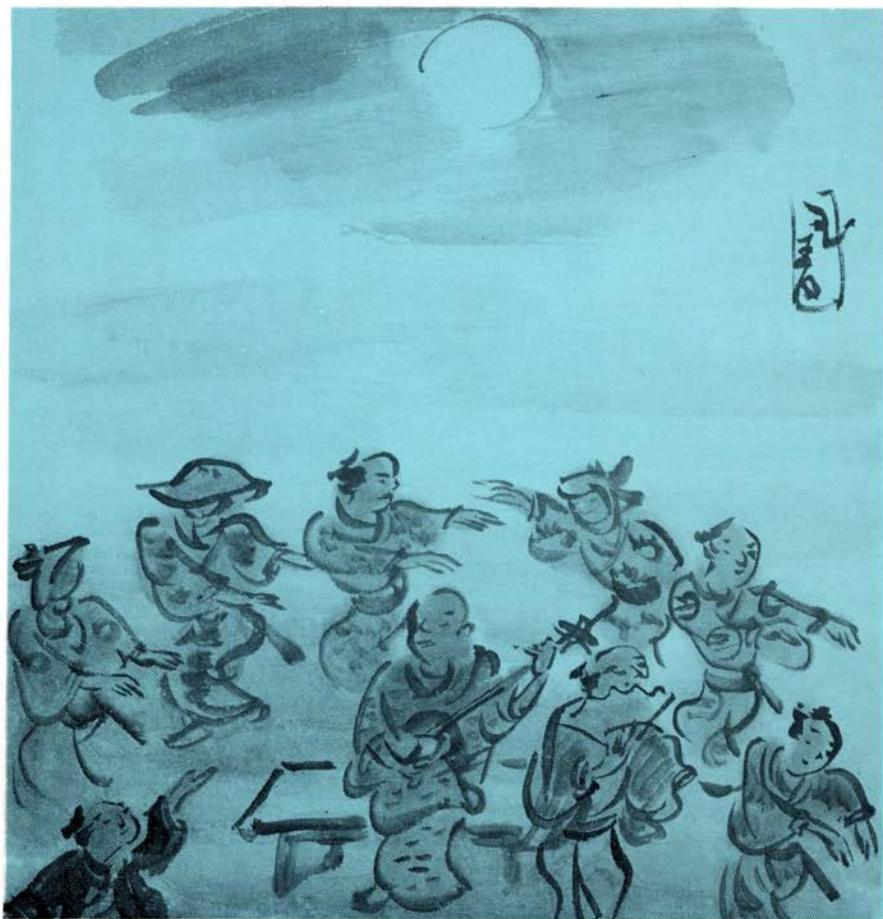


# 川柳塔

昭和五十六年七月二十五日  
昭和五十六年八月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷六五二号



日川協加盟

No. 651

八月号

気どったカッコウはきらいだ、  
 思いのままに  
 装うのはいいものだ、  
 熱い心を満たす  
 オーエスケージェフ。

**OSK JEFF**  
 ORIGINAL DESIGN

株式会社 **オーエスケー**



つめたさに、おいしさをそえて……………

# アイスクャンデー

あずき・チョコ・ミルク・パイン



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドーゾマ店  
 近鉄(アベノ・上六・奈良・東大阪・京都各店)  
 サン・ストア(中之島・淀屋橋各店)  
 京阪モール 新川売店 虹のまち鹿鳴  
 南海難波駅構内店



大阪・なんば



TEL (641) 0551

## 続 夏 座 敷

大阪へ来たたら寄れよと旅の酒  
方言をまねて度を越す旅の酒  
帰省子に浴衣は既に縫い上り  
老妻の袂に鈴の鳴る夕べ  
奥さんの助言ニツコリする話

先月号に夏座敷を書いて、クローラーをくさしたら、今度は本格的な夏座敷に出逢った。  
或る日主幹を見舞うと、八畳と十畳の二間続きの長い廊下に青簾が吊るされて、広い庭から吹いてくる風のナンと涼しいこと、天然クローラーという言葉があるが、クローラーという言葉で雰囲気をごわしてしまふ。十畳間の本床には、かの有名な近藤浩一路氏の長良川の鶉飼の軸がかけられている。時々風に揺られて、鶉飼の簾火が動くようである。奥さんは「昨夜、眠れなかつたので、今朝から御機嫌斜めなんです、でも奥さんが来て下さったから、大分話すようになりました」と言われて、「私は二十四時間勤務で、私の方がまいいりそつ」等と仰言る。

いだるい動作で車椅子に乗られる。その時の左脚と右脚の位置交換が舞踊の「て」と同じであるそう。奥さんは「この動作は舞踊の手と同じですよ、先生は嘗て舞踊をやりましたから、こんな時に間にあって、リハビリの先生から、おほめに預つて……何が幸いになるやら」と言い添えられる。  
髭面の先生はニッコリ笑つて首肯される。髭で車椅子は、四つと廊下に出て得意気に動き出した。この日、五目、髭をあたつておられないのか、俗に言う無精髭がのびて如何にも病人らしい。「先生、髭を剃りなはれや」と私は思った通り云うと、「ベッドに座つた姿は全く半名主のようですよ」と奥さんが相槌をうたれた。「小松園さんは朝、交替に来た娘さんが毎朝剃られるそうですよ、外出しないから色が白くなつて男前ですよ」と私が言うのと、奥さんは、「こんなに伸びて、剃ると痛がりますし、のびかけは痒がります、チツ

## 西 尾 葉

川柳塔八月号

トも言うことをきかない駄々っ子ですよ」とと愚痴られる。「丁度鬼界ヶ島の俊寛のようですよ」と言いつつ車椅子について行くと、先刻から庭師が入つていて、木造りがすんだすつきりした樹々に庭師の一人がホースをむけている最中であつた。樹々からは滴りが落ちて、それを通して吹いてくる浜風が涼しくも涼しかった。丁度車椅子が玄関の方向にむいていたので、之を機会に「お大切に」の言葉を残して、小松園さんを見舞つと、丁度、奥さんに上半身を拭いてもらつていられるところだつた。「骨が邪魔になつて之以上瘦せられへんのや」と相変らずの冗談をとばし乍ら胸を叩かれた。非常に元氣であつた。  
お二人共、お元氣だがお身体が不自由なのが玉に瑕だ、一日も早く、あんよは上手になつて戴き度いと切に祈るものである。

座右の句

凡人にもつたいたなくも湯があふれ

(久米雄)

私の句

本当の涙は腹の中に落ち

荻野 鮫虎狼

# 川柳塔 八月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

続 夏座敷

西尾 栞 …… (1)

句会生生

高杉 鬼遊 …… (2)

■川柳太平記(39) ポンチ絵事始めと団珍

東野 大八 …… (24)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三三丁)

川柳塔(同人吟) …… (26)

水煙抄

西尾 栞選 …… (4)

秀句鑑賞

「同人吟」  
水煙抄

正本水客選 …… (30)

愛染帖

同人吟

長野 文庫 …… (28)

小西無鬼さんを悼む(弔辞)

水煙抄

小林由多香 …… (29)

鳴呼 賢良院温誉正心居士

愛染帖

橘高薫風選 …… (40)

遠山可住

西尾 栞

西尾 栞 …… (43)

遠山可住

遠山可住

遠山可住 …… (44)

## 句会生生

高杉 鬼遊

夜店のように毎日どこかで句会があり、その気になれば、川柳を楽しむに事欠かない京阪神は、正に川柳王国である。

遍歴とは大げさだが、気の向くままに顔を出したことがある、他柳社の句会感想を見たまま、感したままに書いてみる。

まず京都では「川柳新京都社」があり、かつての「平安川柳社」の作品面における、質的な流れを最も多く引きついでいるようだ。それは主宰者、北川絢一郎を取りまく勉強熱心な集団によるものと思われる。またそれに呼応する。外人部隊」と称する、他吟社の柳人が常時出席して、川柳界のサロンの雰囲気をかもし出しているのが嬉しい。

大東市に、山本翠公が世話をしている「大東市民川柳会」があり、地区の川柳人育成に孤軍奮闘している。

「番傘わかき川柳会」は、今では小集句会と云えぬ老舗と、毎回六十名を越す動員力は、近畿第一と称して過言ではない。近來女性の参加も増えているようだが、作品面にお

小西無鬼師を悼む	河原みのる	(44)
嗚呼 大樹小西無鬼氏	板尾 岳人	(45)
「情熱」	山内静水選	(46)
一路集「ローン」	藤井一二三選	(46)
「孫」	石垣花子選	(47)
初歩教室	本田恵二朗	(48)
大萬川柳「まん中」	川村好郎選	(50)
柳界展望		(52)
第17回路郎忌・本社七月句会		(58)
各地柳壇へ佳句地10選(里小路選) / 71		(67)
雅号ぶっちゃげばなし	稲葉 星斗	(69)
編集後記		(75)

薫風・酔々・鬼遊・史好……(75)

座右の句

辛口を好んで男盛りなり

(牧 人)

私の句

めぐり合い過去を言うなと手が温し 籠 島 総 甫



いても一層華やかさが望まれる。同じく老舗を誇る、久保田以兆主宰の「川柳天守閣」は、毎回盛会であるが、作品面に今一段の光彩を望みたい。

豊中に「番傘みどり川柳会」があり、神谷娯舎亭を盛り立てる強固なスタッフがいて、宿題の選を担当している。常に安定した作品の中に、いふし銀の佳吟に出会う楽しみがある。席題選者には外部の者を当て、配意のほどを見ることが出来る。初心、経験を問わず勉強の場として人気がある。

同じ句会場を利用し、同じ番傘系統である「番傘人間座」は、研究会の趣があり、吟社や人員の多寡にこだわらず、個性の強い作品を見ることが出来る。一題をプリントにして配布、互選の上、活発な意見交換は、勉強の場として有意義である。

昨年三月に発足した「一枚の会」は、(へせんば)の流れをつぎ、顔ぶれは多士済済であり、高度な作品を志向しているが、代表者、定金冬二の意欲を実現、具体化するには、陣容の強化と時宜を待たねばならないようだ。神戸の「六甲の会」は、金沢伸子が主宰、ふあうすと系の参加者が多く、家庭的雰囲気の中で地域婦人連の育成も兼ね、作品面に新しさを指向している。他社の柳人のも活発に呼びかけ、女性ながら意欲的である。斜視的な所感で、事実を反した面はお救し願ひ、各会の発展を祈って止まない。

(文中敬称略)



西尾 栞選

大阪市 川口弘生

久し振りの友へ指輪は嵌めず会う

タンポポの種子おのおのの翔ぶ心

先祖の血鼻の高さで教えられ

米寿なお美人だったと知れる顔

嘘つけぬ顔はして居ぬ骨董屋

兵庫県 遠山可住

仏さんのようで相談にはならず

大根を洗いふるさととなつかしむ

指一本の怪我でお風呂がぬくもらず

女ヘンの字には女の業がある

ちよっかいを出して徹夜の羽目になり

島根県 堀江正朗

喜びも口惜しさも知る同じ指

横向いて耳に逆う風をよけ

七十の自画像かけぬもどかしさ

両の手に触れる幸せだけは知り

盃は働きの指が好き

大阪市 中川滋雀

こまねいた腕から明日が逃げていく

持ち駒の一つになった深い読み

諦める速さで白髪は殖えてくる

六段の調べで燦々とふる野点

梅雨空へ妥協を知らぬガラス窓

鳥取市 河村日満

取賄の主犯に狂い死にはなく

還暦のこの頃妻も気短に

日本の働きすぎは機械にも

子を叱るその三十の親叱る

傘の柄にさもししいイニシャルを刻む

船上山にて(一句)

米子市 八木千代

倉敷市 野田素身郎

夏草やこも論旨の翔んだ道

くり返す別れに揺れる島の唄

明けがたの寒さも身よりない擬

行き詰り井戸の底にもあつた空

先頭の蟻で疲れを覗かせぬ

米子市 林瑞枝

絵日記のせめて桜は散らさない

馬鹿になる術も覚えて里帰り

こんな時亡母の方がえらかった

梅雨の入りリウマチの友へ書く便り

ごりっぱな意見相手にせぬ意見

岸和田市 高橋操子

目立ちたいおしゃれが目立つ遅刻する

竹原市 山内静水

群衆の一人一人はお人好し

ひとり来て二人で帰る交番所

戦争の好きな奴らを敵にする

上役の孫へうきうきかぶと虫

いたずらをされぬおんなも哀しかり

八尾市 高杉鬼遊

同姓七軒よりそうように妻の里

桜井市 岩本雀踊子

鮮やかに描けて瞼の物語り

つぎなおすお茶へひとりの雨でよし

折目からこぼれる笑顔だとおもう

櫛掛け城代家老さんと云う

生きざまへかたじけなくも風薫る

倉敷市 水粉千翁

明日へ逃げる母の妥協ぐせ

堺市 高橋千万子

あじさいの今日紫につづく思慕  
やつと間に合い余情のない別れ

ふつとしたふれ合い悪の芽が育ち

片棒を担ぐ男の方が弱気

シャンデリヤなとききれいな仮面だなあ

島根県 西村 早苗

夏間近か夫婦が語る空がある

ぶつたおれてもよし今夜はうまい酒

カロリーは知らぬが里の味が好き

誤解から逃げようとする縄のれん

金がないので善人の顔でいる

大阪市 小出 智子

あさからぬえにして花に水をやる

ひたむきな日はコトコトと豆を煮る

妻少し太って夫婦丸くいる

あじさい寺の冬を想像せぬことだ

ぼっくり寺へ命預けて生きのびる

大阪市 河野 君子

季の移り雨はやさしいモチーフで

煎じぐすりが匂う雨季の母の部屋

ふたすじの虹を見ているかたつむり

あじさいよわたしは主義を押し通す

ときどきは急カーブに遇う妻の坂

八尾市 納 糸 葉

紫陽花のくるくる変る偽証罪

田を植えるバズルを埋めて行く様に

真直ぐな言葉を少しよけて受け

故郷を風の便りに聞いている

その夜から逃げ出す事を考える

今治市 月原 宵明

ぜいたくな遍路の肩にあるカメラ

セールの靴に鉛のある薄暮

昼の月余つぼど暇なのが見つけ

現実には裾から冷える肱枕

一合で寝る善人で赦される

神戸市 山口 美穂

意地悪を言うて心を探り出す

初夏の風にわたしの思い問うてみる

どうしても素直になれぬ野の茨

くるい咲く花を笑うてはならぬ

自画像をみつめるもう一人のわたし

青森市 工藤 甲吉

核のカサは要らんのかネとおどかさ

三十六計棒読みで押し通し

落日の赤さを劫火とも思い

お面・胴・小手とサラ金容赦せず

他人は他人 自分は自分佗しけれ

藤井寺市 児島 与呂志

嫌われも好かれもしてでかい声

幸せをいっぱい振る手に孫が去ぬ

二の足を踏んでやっぱり悔いる席  
丸刈りを巡査の変な目に耐える  
老妻に悲しみこらえる部屋がない

八尾市 宮西弥生

陽足がやや長くなってからの罪  
自惚れを大きくもっていて弱らない  
阿呆になる笑顔母にだけ出来る  
一枚の絵になる女の大ジョッキ  
六月の山深い深い眠りなり

大阪市 神夏磯道子

発つ駅の嵐晴れる日を信じ  
妥協すれば幸せになること知ってるが  
調べられすぎて売るのがいやになり  
後から従って行くから労られ  
パラソルが少し妬いてる花菖蒲

竹原市 小島蘭幸

子に内緒妻に内緒のボーナスよ  
無職より無趣味が恐い父である  
セールス十年ものを言うのがふと恐い  
産声よ日の丸に風吹いている  
長女次女我に女難の相ありや

大阪市 金井文秋

割勘の暮しに同居馴れてくる  
吹きだまり人情はまだ地に墜ちず  
女の子レモンをかつこよく食べる

性知識婦人雑誌がくどすぎる  
退職でようやくラッシュユから逃れ

和歌山市 垂井千寿子

掴み合いの味を羨む一人っ子  
関節の痛み中古意識する  
青い鳥と一緒に住んでいる自信  
夏菊の気品の冴えに負けている  
楽園の入口にある落し穴

富田林市 和田維久子

昭和五十六年六月六日母の帰らぬ遍路笠  
明日の死を外に田植の事を聞き  
何時迄も生きても同じと母の死生観  
右に寄れば右向く黒枠の亡母の瞳よ  
九十歳天寿全うすと云う他人なり

泉佐野市 阿萬萬的

画廊の静けさみな善人の顔にする  
職のない日々ですおとほけ板につき  
年甲斐もなく老妻の電話好き

小野竹喬画展を見て

松頬杖をついて波音聞いている  
快晴の海です小舟が寝ています

倉吉市 奥谷弘朗

子が無くて人は一代主義と決め  
一言が薬になったか妻素直  
出直しの出来た勇気をほめてやり

青雲に炎えた流転の夢のあと  
メンバーに漏れた同士で馬があい

岡山県 嘉数 兆代賀

子等船出母の港は風ばかり

親の目の届かぬ位置で子を祈り

飾るもの持たぬ十指にある温味

下り坂足のもつれは口にせず

余生なお明日へ作業衣白く干し

大阪市 天正 千 梢

ばあちゃんの距離でけっこう楽しくて

注意力集中出来る空腹で

冗談じゃない「もうはなさない」なんて

雨だれが私の小言に似たりズム

精いっぱい咲いて平戸のかなしみよ

尼崎市 黒川 紫 香

勇退と云う名でおとこひとり去る

住職も野良着で戻る島の寺

よう出来た人やと死んでから云われ

焼き鳥の匂いの中で借る小銭

一日のストでレールが錆びてくる

東大阪市 市場 没食子

旅行から帰れば台所が乾き

盃に吸い寄せられた唇よ

逢えばまた別れともない業を累む

てれくさいがなの続きを聞くこと酌ぐ

二男転居

ローン背に勤めに楽な京へ越し

今治市 長野 文庫

この家で死ぬ気が夫がもどつて来

海のたりのたり釣舟あまやかす

見るかぎり平和そのもの風ぎの浜

なぐり込む波へ砂浜無抵抗

観世音拝み返えしているポーズ

八尾市 香川 酔々

キリストがキリストになる石の苔

潮騒いの中の祈りは隠れ耶穌

絵硝子のマリアの瞳から夏になる

閨閥に挑む勇氣は持っている

一匹の蟻が溺れる塩の海

和歌山市 野村 太茂津

真剣にどんでん返し恐くなし

追い越してくれねば眠るかも知れぬ

言外の意味を汲ませるずっこけて

媚売って男転べば踏みつける

男優し単細胞を云う勿れ

和歌山市 西山 幸

お隣りの花の赤さが目に渗みる

得意満面アドバルーンが風にのる

無器用な今日を見つめる日記帳

残された寂しさに慣れ胡瓜もむ

教会へ行く嘘つきの靴の紐

倉敷市

田垣方大

人生は楽し梅雨にも詩があり

沛然と降つても罪は流されず

立前で記者会見は乗り切れず

短針のような男にある勝利

ワンタツチだんだん思考力低下

寢屋川市

柴田英壬子

姑は哀しと思う水入らず

年経れば愛する花が多くなり

墨染めにかくす捨て身の過去の指

コマーシヤル購買力と別に見る

天の川織女もビキニ着けたかろ

大阪市

西森花村

役人が叙勲待つてる老衰期

新社屋社名も隷書で出版社

出張所ともかく所長だけきまり

高天ヶ原行けば空地もありそうな

湯治場で自炊してますリリシズム

島根県

堀江芳子

熟年とか積まねばならぬものばかり

生涯の花束 還暦祝われて

怒ったら負けになりそう深呼吸

果てしない世に止り木の小さすぎ

ぎこちない所作が嬉しい温かみ

倉敷市

小野克枝

髪の毛の先まで恋は光るもの  
昨日よりきれいな顔で目をさます

モーニングの父の泣く日がきつとくる

海鳴りがこわい私は失語症

ほっとした顔が柩の窓にあり

奈良県

村上春巳

雪解けの水が舞台の水芭蕉

カッコウが鳴いてる雪を踏む道で

訴える瞳ガイドは原爆子

ピカドンが光った空の鯉轍

原爆の瓦礫が靨く無言劇

富田林市

板尾岳人

草の芽に金剛山は賑やかに

太陽と喋る男と峰歩く

八月のみどりは父を恋しがる

汽車の出る山の彼方に父の棲む

雨恋し真夏の滝へ父を呼ぶ

島根県

藤井明朗

札束の魅力におとこ笛を吹く

逢えばもう別れの風が背中を押す

親友の訃を聞く天寿と思いたし

自然の恵みを忘れてる人間の罪

引金を引く指誰も持っている

高槻市

若柳潮花

紅バラの匂い男に誤差があり  
五月雨は女の城が落ちる音  
劇中へ吾が生きざまを置いてみる

鳥取県 鈴木村 諷子

男とおんなまだともだちの城にあり  
群衆が指一本にかくれたり  
一匹の尺取虫で死んでゆき  
年寄の写る鏡の律義もの

奈良県 上田 翠光

子育てを思えば息なぞ抜いとれず  
耐える事知らぬ子にする使い捨て  
オイと云うたらあかんと孫がたしなめた  
生涯教育俺を見つめる孫が居る

高槻市 福田 丁路

風薫るローカル線の無人駅  
老いてなお個性を生かす身だしなみ  
恩を知り恩に報いた晴れ姿  
負けず劣らず奇麗な嘘の立ち話

富田林市 岩田 美代

納得のゆく目ゆかぬ目閉じている  
退屈な話釘きつちりかけている  
やさしい方の心で考える古都の梅雨  
悪女めく事もないので梅漬ける

八尾市 高橋 夕花

雨三日いやな私になっていく

諦らめの形で折つてるだまし舟  
風船がしぼんでからの落つきか  
切り口をかばいきれない母でいる

西宮市 藤村 女

自らを欺く酒に身を沈め  
浴衣着て出れば一味違う風  
よく稼ぐ後姿を噂する  
路地裏を抜けると過去が姿出す

米子市 石垣 花子

芸の無い男手拍子ばかり派手  
法話聞く足が法話を否定する  
政界の裏もおぼえて秘書菓立ち  
梅壇の香りささえに母子家庭

米子市 小西 雄々

応援が罵声にかわる負試合  
芳紀とは別にわが娘も食べざかり  
管理費も考え仰ぐ天守閣  
還暦をまだ青年の気で迎え

羽曳野市 塩満 敏

勇み足あるから世の中おもしろい  
甘言に乗ればどっこい蟻地獄  
男なら乗ってみたいなだまし船  
婦唱夫随ぼちぼちと行く航路

鳥取市 小林 由多香

慣れ合いを避ける冷飯食わされる

盛大な拍手嫉妬の音がある  
狂っていた時計に一日狂わされ  
車椅子母の視野からはみ出さず

神戸市

中村 ゆきを

びっしりとレールをひいて子を殺し  
はなもちのならぬ男が美女を連れ  
屋上で吟詠すれば城が見え  
炎天に金策つまる夾竹桃

柳井市

弘津 柳 慶

晩酌へ妻の面影ふとよぎり  
おいバラが咲いたよ今年は俺一人  
風化にも豪雪にもまけず地蔵尊  
デイトの余韻くずした母の声

米子市

増田 竹馬

奥伝へしびれた足をなつかしみ  
わびしさは税金医者代みんな只  
条件を盾に独身謳歌する  
八十路細い柳で折れもせず

鳥取市

両川 洋々

石蹴れば石も疲れた影を持ち  
疼く傷あるからおみくじやたら引く  
結婚十年妻のペースに巻きこまれ  
義理一つ欠くシナリオ妻が書く

竹原市

森井 菁居

神が棲むメ縄として信じよう

駄馬と駄馬添うて夫婦の歩が揃い  
反逆の絵筆よ赤をためらうな  
友情を守る嘘ならそれもよし

生駒市

草深 醉升

家具売場高嶺の花を見て廻り  
人裁く判事が捕まる世となりぬ  
かたくなに書齋に籠る老い独り  
我が死後がどうのと今日をやつと生き

鳥取県

川崎 秋女

笠のひも締めて男の瞳がキラリ  
離農する納屋に残った笠一つ  
狂い咲く花にもあった自己主張  
新築へ蟻がこのこ同居する

呉市

林野 甦光

祭壇の前で裏切りだけ認め  
もどり梅雨あじさいの首くたびれる  
意志強きナースの束ね髪に会う  
その中で虚飾の肩書一つ持ち

倉敷市

稲田 豊作

結び目の解けぬ呪文を妻がする  
拳固より笑って来る奴怖ろしい  
トランペット吹くと童話の森になる  
泣きに来て海の広さに叱られる

大阪市

那須 鎮彦

マザー・テレサの愛は若くほどばしる

つままれたイチゴは赤を主張する  
はばたける自信がさせている助走  
まっすぐな風にとまどう風車

諫早市

原田明春

エプロンをはずして女房に居直られ  
道草をさせるネオンがまたたけり  
教育ママ瓜に茄子をならせる気  
せっかちが押してもチャイム同じ音

奈良市

森田カズエ

深爪の痛みこらえて被る仮面  
旅仕度入れて出してはまた入れる  
摩周湖の思い出母が若がえる  
反省のいと口くれた母の声

倉敷市

小幡里風

他人には隙も見せてる夫婦愛  
帯しかと結び女にある決意  
背信の傘春雷におどかされ  
一輪挿造花でもいい妻の留守

出雲市

原独仙

間違っただかかった受話器に罪はない  
ランドセル急ぐ三重丸背負い  
適役を配しておかか太閤記  
踏切り番白旗ばかりで味気なく

大田市

藤田軒太楼

運鈍根人生航路は波まかせ

時機尚早本心まだまだあかされず  
母方に似たか図太い性を持ち  
途中から抜けるスリルを知る二人

宝塚市

傍島静馬

一生のたのみ母親何んべん聞いたやら  
リハーサルでとちり本番でなおとちり  
父の日の父別宅できこし召し  
まんわるいホタル団扇のほうへ飛んでくる

美祿市

安平次弘道

平凡な影は夫婦の安らぎか  
指切りに男の指は冷めている  
くちびるが渴いて嘘がきこえない  
カラフルな薬にひそむ副作用

松江市

恒松町紅

他人顔でいても祭祀のつけがくる  
女房がテレビドラマに涙して  
一人茶をすすり無職の真昼間  
菓子折りで無理な頼みを聞かされる

寝屋川市

宮尾あいき

供花枯れたお墓のほとり鬼あざみ  
墓詣亡夫へあまえた声になり  
雨を恋う姿勢であじさい天へ向く  
水無月と呼ぶから雨も遠慮して

奈良市

宮口笛生

信州の旅より

善光寺人を信じた鳩と撮り  
雪深く白馬は夏を寄せつけず  
可憐さに足をとどめる水芭蕉  
雨男天気男が勝った旅

倉敷市 藤井春日

生涯を器用に生きて羨まれ  
ほどほどに品よく飲んでよい夫  
幸福の道へ二人の歩巾合  
口論の明け暮れながら来た金婚

兵庫県 辻文平

オートメーション家訓が散って行く老舗  
古里の民話流れるたらい舟  
躓いてテンポの早い曲になる  
一筋の枯野見飽きた仁王の眼

島根県 榎原秀子

胡麻豆腐賞味の舌はたしかなり  
本好きと本が嫌いなあねいもと  
野苺と語れば聞こえるわらべ唄  
控え目も時に美德でない知り

松山市 谷真風

老いひとりひっそり住んで庭茂る  
俺の言うことをあいつが言うて去に  
うっかりと入れ歯忘れて来てしま  
お茶漬の新茶にこころ足る日なり

京都市 都倉求芽

貯金おろして棚ボタのように見せ  
葱坊主今日は床の間で見得を切り  
消火演習燕追い出し慌てさせ  
好きな色がようやく変る年齢になり

平田市 久家代仕男

土と居て企みもなき花の世話  
快諾へ妻は何かを言い足りず  
清算の恋にいたわりまだ残り  
マンシヨンの孫に土産の蝸牛

大阪市 本間満津子

手を握り逝くとき云いたいありがとう  
日は暮れてひとり降り立つ無人駅  
聞こえぬ耳聴く耳うまく使い分け  
指切りして寝た孫おいて帰られず

香川県 岡田拳法

部下もまた採点してるとは知らず  
かわりは給料だけの労使です  
さあ一步踏出せ過去は振向くな  
華々しく本音隠して核論議

玉野市 小谷仙山

山其処に有るから登る蟻の列  
臍曲げて曲った事は嫌いです  
拳銃がほしいと思う靴を履く  
鬼あざみ何処で咲いても刺を持つ

松原市 玉置重人

失業中もつたいなくも箸の位置

朝刊がすこし濡れてた梅雨の入り

お見舞にスイカのハシリ買う打算

おごられて妻は不審をひとつ抱く

松江市

舟木 与根一

神様も鉦や太鼓で人を寄せ

若き日の道楽小節で聞かされる

管理職胃袋をとり辞めていき

余生だから各駅停車に乗り替える

下関市

国 弘 半休門

勲章をもらって貰らわん気も分る

肅々と八十路の玉歩おでましぬ

お尊顔真近に拝す車椅子

年寄りの念仏独りごとみたい

東大阪市

齊 藤 三十四

行き過ぎへ老いは一喝もっている

楽園に河内音頭の輪が踊る

革新の労組体臭離れない

代議士は赤坂でなら本音言う

神戸市

仲 どんたく

太鼓判医者に押されたから不安

表彰状枯木に花の咲くごとく

アルカイックスマイル齡の深み添え

和歌山市

若 宮 武 雄

痛ましいニュース今日は聞く立場

赦されてから過ちと覚る性

待合室一人は喋る役にする

成績の点にならない人間味

岡山市

時 末 一 灯

ペンネームで果せぬ夢を書きつづけ

中流に贅肉がつきすつこける

病んでからやりたいことの数がふえ

宿の窓女ひとりを深くする

大東市

土 岐 トク子

奥飛驒の慕情盲人心しむ

盲人の歌手喜色満面歌うなり

誕生石憶い出のこし逝った人

外地産娘にためらいつつも派手に生き

宇部市

平 田 実 男

父交通事故一年経過(二句)

呼べばただ目だけ動かす父となり

加害者へ付添さんも腹を立て

鯉のぼり見栄も一緒に泳がされ

ためろうた初夜を銀婚なつかしみ

京都市

松 川 杜 的

薪能をみて

絵になるか菊滋童を追うカメラ

満天の星に響けと鼓の音

能面のゆらゆら薪の火に染まり

春宵一刻みかんの花の匂う徑

和歌山市 内芝 登志代

蛍とぶ豊かな心になるふたり

メダカ棲む小川へ思わずわらべ唄

十人十色自分の色が解らない

ひろい猫今では我が家のボスとなり

和歌山市 福本 英子

お向いの空地へ書いてる青写真

腕組みの紫煙へ女近寄れず

五月雨と一夜明かした月見草

九十の母に九十の知恵を借る

大阪市 西川 善紫

金の威光か搔ゆいとこへ手が届く

罪なシャネルの五寝てる子を起こす

西国札所(二句)

山門へ石段さけた老いの足(長命寺)

登りつめて蒲生野の景に手をかざす(観音正寺)

島根県 小砂 白汀

魂を入れた仏像盗まれる

でたらめを言うにも順序があるようで

泣いたことまで喚く拡声機

日陰へは日陰の草が根をおろし

島根県 錦織 文子

蛇の目傘広げて女に戻る宵

伝説へ藤 真白う咲いて尼の寺

はぐれ鳥今日も夕日を追いかける  
こんな時の言葉見つけぬまま別れ

東大阪市 森下 愛論

憎まれ口をたたいて歩くはしこ酒

ただ酒の席は相づちうつばかり

カウンター並んで呑んで愚痴ばかり

仕事の話は云うなど酒をつぎ

大阪市 黒田 真砂

日曜日妻と夫の市場籠

持てる悩み知らぬ男のコップ酒

中世の詩読んでねむれぬ夜がつづき

しきたりはどうあろうともマイウエー

大阪市 藤田 頂留子

千円の時計も電池の有るかぎり

コンピューター押す指さえ有ればいらぬ人

食欲も消化も薬を助っ人に

もたせたくない核だからもちたがり

松江市 柳楽 鶴丸

再会するといたずら小僧にかえる

嘘も方便でもこれだけは許されぬ

鶏ぐらい翔べると嬉しそうな妻

ニア人へ吊橋都合よくゆれる

岡山市 川端 柳子

雨蛙そこにすわって愛される

鏡台の抽斗しにある安息所

若葉風あなたの過去を知りました  
茶を入れてことの一つが裁かれる

堺市 大道 美乙女

バス停で乗らぬ仕草は横を向き

砂時計その一粒にある主張

乳呑児の欲よ片手で乳房持つ

栄光も座折もあつた人生譜

大阪市 柳原 静香

消息へ血のつながりが恐くなり

聴えない耳へ確かにくになり

錠剤を数え五月の空を見ず

きこえない耳で妥協ばかりする

和歌山市 浦野 和子

年輪がやんわり痛いところを突き

茄子漬を盛るにも白磁の皿を撰る

これからの地球へ孫よ何う生きる

まだ泣ける俵せだけは持っていて

岸和田市 清野 こう

忘れ傘途中で気づく雨上り

ものぐさになって一人の台所

猫抱いて四十男のまだ一人

神様も首をかしげる願ひごと

岸和田市 古野 ひで

グループに無口がひとりいる無気味  
雑音の波紋に本筋ゆがめられ

釣堀の魚に初心を見ぬかれる  
山椒の実煮詰める匂い亡母おわす

岸和田市 島崎 富志子

たよりないのが一番ファイト燃やして

昼のドラマに縁なく職場へ急ぐ足

結局は夫婦二人となる覚悟

俵は表通りに行く人生

岸和田市 福島 せつ子

各部屋の時計にぎやか鳩も鳴く

年金を上廻りする趣味がふえ

優勝したチームに教え子いるバレ―

ウインドに写る猫背へ年おもう

守口市 羽原 静歩

我や先人や先のちのある限り

古傷は言うまい二人三脚で

漫才のコンビ夫婦めき他人めき

ふるさとに帰りふるさと遠くなり

姫路市 大原 葉香

試歩の数一喜一憂して日課

赤、黄、白でのみ分け葉すけ

明日という逃道があり今日暮れる

コーヒ―を飲むのに四面楚歌の位置

青森県 五十嵐 操史

子を産まぬ姑が辛く当る癖  
独身は懐かし盗み酒の味

軍備には好意よせてる日本式  
淡水を吸り上げればよう聞え

和歌山市

松原寿子

恩愛のえにし乳房の奥へ抱く

海の蒼さに負けたくはない愛一途

コンバクト不意に拡がる海の蒼

背を追うて激しきままの訣れかな

八尾市

飯田悦郎

思春期の少女大人の罪を見る

自分の意捨ててて人情へ妥協する

髪うすい人が本当の母である

現実はやその嫁だが娘なり

三重県

川上溪水

ここだけの話僕だけ聞いていず

倅せを探し疲れている婚期

出遅れたたった一步にある誤算

通知表親に似た子だ叱るまい

豊中市

安藤寿美子

人間の欲は山さえ割って見せ

無宿人やのうてよかったと笹だんご

さつき剪定夫が憎い日はかどって

娘二十五のんびり遊ぶヨーロッパ

松江市

梅本登美也

シグナルをふっと見上げる千鳥足

風そよぐ葦にアヒルの物思い

満たされぬ心で仰ぐ夜半の月  
絵に唄にもてはやされる嫁ヶ島

大阪市

清水健司

城を見て俺はどこからつぶそろうか

初対面仮面をつけた話しぶり

電動の鉋とひとりいる大工

歯を抜いて欲を忘れた顔になる

大阪市

江城修史

残り火の炎と燃えぬのがわびし

巡る四季素直に巡るそれもよし

人は地に溢れて惜しい人が逝き

うずくまる居職に生きる詩がある

守口市

野呂右近

菊手掛け子育て頃に思い馳せ

先に水やる鉢自分が買った苗

奥様によろしくと寡婦距離を置き

香糞に迄ライバルがつきまとい

寝屋川市

江口度

不眠症研修会ではよく眠れ

ロボットのボタンはいつも妻が押す

花時計もうあきらめの時間でず

丸木橋渡り続けている若さ

大阪市

北勝美

緑にも七色があり虹かかる

嘘ついて丸くおさめる神もある

難民へ法律人が作るもの  
山越せば又もや山が待ちうける

西宮市 野呂鶴汀

嫁に肩叩かせ人前だけの仲  
雑談になると一番良く喋り  
猥談を傍の転寝聞いて居る

生前の美ぼうは知らぬ白骨化

京都市 山本規不風

ほだされて出直す女に金がない  
満月に心変りをした狸

九分九厘の話女が引戻す

アリバイがあつても税金容赦なし

富田林市 中村優

注目をされて喪服にすぎがない

御亭主を粗大ゴミよと言わせる世

結論がちゃんと割れてる猿芝居

山頂に立つては富士の絵が描けぬ

米子市 桑原伊都

旅ごろみどりの風に乗って来る

子守唄添い寝の母を先に寝せ

土鈴から旅の歴史をきかされる

遅刻の子叱る教師も過去をもち

米子市 雑賀美世

楢山をよそ事に聞く幸を抱く  
地平線明日へ繋がる陽を沈め

水色の皿で銘菓に涼も添え  
一線を引いて波紋のない同居

米子市 青戸田鶴

子の誘う山の魅力がわかりかけ  
まひの子の自立の夢へ土をねる  
娘にそつと鈴をつけたい適齢期  
みず色の瞳の中にいる孤独

みず色の瞳の中にいる孤独

米子市 政岡日枝子

寡婦にある女の色が措しまれる  
まだ女でいたいルージュに焦りみえ  
母の眼が応援している許してる

形勢不利仏間の夫をかつき出し

形勢不利仏間の夫をかつき出し

米子市 菅井とも子

水色の蚊帳なつかしい里の夜

帰港する船待ちわびる鏡掛け

二日酔の夫は遅刻もせぬ平和

無彩色の暮しに孫が色を呉れ

出雲市 吉岡きみえ

袖着て女四十の香を放つ

女をすこうし残して身がほてる

いいことも悪いことも長生きの耳にきく  
まるい灯を湖面に平和な城下町

まるい灯を湖面に平和な城下町

新宮市 大矢十郎

上等兵のまんま停年期が近い  
人件費が高いと儲けた人が云う

国賓へトヨタマツシタ京都奈良

堺市 藤井 一二三

母の日の妻へ勲章肩を揉む

若葉青葉まぶしく老いの茶を啜る

自転車の方が横着だった事故

鳥取県 清水 一保

人情を笑って耐える帰る道

役入れたポスト明日を待たす音

振り返るひまなし人生登り道

榎原市 岩井 本蔭棒

やけくそで走る国電とも見える

芋大根切って包丁無事な日々

順番を逆ろうて君先に逝き

笠岡市 松本 忠三

味方から骨折り損の声がもれ

ゴキブリの子たたこうかどうしよか

ただ今の小声に何かありそう

仙台市 川村 映輝

軍事機密つんば棧敷で論じてる

何時死んでもよいとせつせと医者通い

男女同権生理休暇は生きている

兵庫県 河原 みのる

一ト搏ちのブヨのいのちかて命

来生は南無や毛虫に生れなよ  
八十年生きれば六代のひとに触れ

衣替え素肌身近にうろたえる

七人の敵隣も向いも通勤車

アルバムの妻それなりの歳の影

カラオケへ来ても軍歌で押し通す

ええ年でデイスコで腰をひねって来

悪友の肩を叩けば笑があり

折鶴の愛は可愛い掌で折られ

明けきれぬ街は汚れてなぞいない

開ける気はなかったけれど自動ドア

上役の無理を我が家に持ち帰り

僥倖ばかり夢見て独り者

ゴキブリを追えば忍者のように逃げ

草刈機よりも手刈りが早かった

窓開けて今日の空気と入れかえる

野良着でも窓に写して女なり

羽根たたむ蝶の呼吸にみる平和

藤の雨寂しい女の肩ぬらす

夕焼へ明日の倅せ赤くそめ

和泉市 西岡 洛醉

姫路市 植村 客遊子

竹原市 時 広 一路

熊野市 坪田 冬花

兵庫県 大江 秋月

島根県 梅 みどり

貝塚市 行天 千代

ささやかな道楽孫と食べに行く  
二階にもどこから来るのか蟻がいる  
おぼろ月窓から見てるしまい風呂

大阪市 河井庸佑

一隅を照らす心を忘れない  
受けてから何だったかと花言葉  
伸びきったパネで手応えない男

大阪市 津守柳伸

性哀し貴方まかせの船に乗る  
年齢がひしひしわかる友の愚痴  
夜遊びを隠し切れない更年期

唐津市 新岡回天子

神仏を信じて嘘も軽く受け  
身の上相談他人がきけばそんなこと  
いい匂い俺の前を素通りし

東大阪市 竹中綾珠

紫陽花の押し花色紙へ張って見る  
漫才で笑った我が声空しくて  
蟻の道と知らず打ち水列乱す

大阪市 西出楓楽

くるくると動け瘦身有難し  
いら立てば塩も砂糖も利かし過ぎ  
デジタルをはめてせかせかとした暮し

町田市 竹内紫鏑

床に手が届く体操すむを待ち

絵馬の文字ゆくすえ事務に買われそつ  
甲子園東京音頭噴火する

八尾市 堀内柳杣

病床で人間とはと問ひ直し  
淋しくもあるかしょせんは一人旅  
雑兵も戎橋では胸をはり

松江市 竹内寿美

二人目が出来て息子の厚い肩  
言い度くて体くねらす水中花  
新緑に染まり二人で眠り度い

島根県 山根峰雪

アメリカは鈴木首相に不安がり  
今更に子供だましの非核論  
姉弟の口げんか真似る九官鳥

枚方市 稲葉星斗

モーニング額の汗をしきりふき  
バスの中火花が見えて徐行する  
祝杯も鏡に映る生ビール

鳥取県 林露杖

ふるさとの山の囁き聞く孤愁  
流水の裳に流転の詩を刻み  
教職に生きて三十の遅い青春

鳥取市 岸本無人

ラッシュにも慣れておちつく五月病  
雌を呼ぶ声とも知らず箆で飼ひ

アジサイの玉がふくらむ雨あがり

倉吉市

渡辺 苦句

過ぎ去った昔バラ色刺の道

熱の入った話に三分の嘘を嗅ぎ

山川草木死後も変らぬけしき

松江市

小林 孤呂二

雑布をかたく絞って今日おわる

現職の名刺で押しいただかれ

悟りえた羅漢の顔のうらやまし

今治市

越智 一水

老人が笑えば年輪美しい

八十の母八十の仕事する

心地よい夜風橋まで歩かせる

大阪市

室谷 徹舟

高ければ良いと限らぬ当り運

土筆つむ孫に女の仕草見る

固そうなお人にあんじょうまかれてた

大阪市

神田 秀峰

空地ある都会を心配してくれる

控え目はもう無い女前よぎり

中年の合唱合うのは軍歌だけ

羽咋市

三宅 ろ亭

守札の門非札の輩写真撮る

海はもう昔に還った蒼白さ

古里の山とよく似た戦あと

島根県

大森 孝華

なつかしい対話故郷の風に逢い

軽石を意識しながらまた拾い

招かれて女心が足袋を選ぶ

島根県

大野 酔夢

妻と子の寝息の中の歯の痛さ

子の乗らぬ錆びたレールを捨て切れず

風のままなびいて咲いた女郎花

島根県

木村 はじめ

衣食住足りて心に足らぬもの

気を配りすぎて相手にきずをつけ

歳月の重さ素直な老夫婦

岡山市

荻野 鮫虎狼

判断が出来たか白い杖動く

おぼろ夜に背中を向けて笛を吹き

水欲しいラクダゆっくり立上り

岡山市

井上 柳五郎

だんだん畑忍従歴史積みかさね

水清き源流の里杉木立

再会の集いに洩れた友思い

岡山市

花田 たけ志

妬く齡でないから体に毒と云い

旗色が悪くて母の背に廻り

わが城に帰れば顔の小ざかしい

岡山市

岩道 博友

夫婦して全力投球老いの坂

小さい愛神を信じていて平和

独酌の傍で世話焼氣を使い

七尾市 松高秀峰

核の傘かむり平和な日が続き

三浪の子のねぼつてる医学の灯

スト解除値上げの罌が待っており

東大阪市 奥山弥山人

消しゴムのきかぬ人生書きつづけ

偶然の出会いが最後になる受話器

好ききらい言わずチャンネル廻す孫

大阪市 欄蘭

無駄話そんなゆとりも有つてよし

ごまかしもせず秒針の正直さ

病癒え踏んだ大地へ感謝する

京都市 山本桐下

本当の阿呆は居ない阿波おどり

紫陽花の雨にどこかでピアノ鳴る

青年と語るに重い広辞苑

岸和田市 原さよ子

子育てにやっばり借りる老いの知恵

お互に待った時間のさばを読み

雑音の中にピーポーよく響き

出雲市 板垣夢酔

子離れのおんな翔ぶ日へ羽ばたきす

燃えているカンナの色を老いが妬く

大正の末路哀れや粗大ゴミ

出雲市 石倉芙佐子

時として青い炎に変わる石

みかえりの峠へ今も行くわたし

輪の中に入らぬ母のない子供

出雲市 園山多賀子

伏線をして影武者出番待ち

ブランコが心の揺れと妥協する

飛魚はとんでももやっばり魚族です

松原市 北野久子

旅立ちの男ばかりも気にかかり

ストレスが教えてくれた黙り癖

聴えなくなつて根性が出来ました

枚方市 水野弘

まだ続く妻の電話はベットの死

父の葬式長寿クラブの旗が立ち

陽焼けした過疎の駅長よく喋り

河内長野市 井上喜酔

花に酔う心の中にあるロマン

重労働じつと耐えてる販売機

底見せて人間性が崩れ落ち

兵庫県 藤後実男

騒音の中で静かに手話続く

男の子女の子にも見えた彼

犬つれて恋人おらぬ娘が散歩

高知県 赤川菊野

振り向けば何時も後に亡夫がいる

届かない愛を日記に埋めておく

台風のクギへ再婚すすめられ

岡山県

直原 七面山

もう秋の気配雀も寄りつかず  
過ちをまた繰返すお人好し

尼 緑之助

打算で信仰  
軒かく釈迦寝像

本 田 恵二朗

一城の主生垣をした小舎で  
農道は舗装田植はもう終り  
愛の巢は一と間卵を抱いている  
忘れてた便りの裏に今気付き  
核騒ぎ夏まだ早い妖怪論

若 本 多久志

無味無臭そんな人生なら捨てろ  
うっかりとしっかり夫婦で悪なし  
多趣味とも云われ気まぐれとも云われ  
めしよりも好きです大めし食うくせに  
欲捨ててからの笑顔が美しい

正 本 水 客

明日香村肥桶肩にゆく男  
義理堅さここにも一人残ってた  
叛逆の素質を秘めて孫育つ  
人間をむき出しにして生きる若い  
老い二人子等それぞれ祝い受く

川 村 好 郎

紫陽花は巻き返す色選っている  
釘の頭一つまともに叩かれぬ  
辞書をひく妻の若さを見ていたり  
遠いものに別れた話聞いている  
声が届いたらし温ま湯を出ない

浜 田 久米雄

ハッキリと辞めよう掟ゆらぐとも  
打ち合せ何も知らないことにする  
くだらない追憶夜が重くなる  
栄枯盛衰自然は同じ雨の音  
あのひとの裸の言葉が眠らせず

橘 高 薫 風

新緑を横に救急車が走り  
親友が来て決断がやっとなつき  
気休めの薬飲みたい時に飲み  
手の皺が見にくく見える五月晴  
現世の一年先がこわくなり

伊 藤 茶 仏

藤沢恒夫先生喜寿  
清冽な泉を抱いて大樹かな  
堀江芳子さん還暦

ある日ふと女は恐いなと思ふ  
蠅がいて創意工夫を嘲笑う  
かたくなに自我を通して臍を噛む

病い抜けして還暦のめでたけれ  
自愛とはこの一杯よ誕生日

## 川柳 太平記 (39)

# ポンチ絵事始めと団珍

東野 大八

——本由は 人の噂で飯を食い

という江戸川柳がある。幕末の頃だが、下谷お成街道に店を出していた古本屋本由こと藤岡由蔵は、聞込んだ世上の出来事を何くれとなく片端から帳面へ書込んでいた。それを聞いて各大名の留守居役が買いにきた。江戸市中のニュースを聴きつけて殿様に報告するのが役目だからである。こうなると本由にとつてこれが商売となり、人を使ってまで種々集めさせることになった。いわば探訪記者だが当時はこれを下座見といった。種一つが二十四文から三十二文、それを本由は九十六文で売ったのだそうである。

折柄、黒船騒ぎとなったので本由の商売は

いよいよ大繁昌となった。大々名でもあれば

何人も使者を出して早飛脚という手もあるが貧乏大名となるとそうはいかない。そこで本由通信社に頼らねばならなかった訳である。九十六文の倍でもよいからということになり自然特種料というのもできたらしい。おかげで本由はすっかり身代を作り上げてしまったとある。(「通信社」高田保著作集・昭27・文芸春秋社刊)

NHKの教育テレビが、昨年暮この藤岡日記をとりあげていたが、それによると、御成道の路傍のとある軒下にムシロを敷き、道筋の風塵にまみれ、せつせと古本の山の中で何事か書きつけている。時には人体卑しからざ

る武家が端座している姿も見受けられた。時に嘉永五、六年頃で、明治三年ごろまでつづけ、ついに一軒の主となる一とある。

江戸の落書・落首がピークに達したのは桜田門外で井伊大老が暗殺された事件で、江戸市中の物情騒然たる政治・社会・経済のトビツクが、それらに拍車をかけた。

落書とは江戸市中の目ぼしい盛り場に、張札をして回ることである。中国の文革は壁新聞の落書で代表されたが、約一世紀も昔に江戸市民が既に実施に移していたわけである。

物情騒然たる往時の江戸市中は、黒船来襲に、奸商の横行による米価物価の昂騰、このための豪商襲撃の打ちこわし、押込み強盗の横行に、不良庸兵どものばつこ、治安不良に不景気風が慶応年間には吹き荒み、やがて明治維新の幕明け、諸事大改変エトセトラ。藤由の飯の種はふえる一方だ。

この江戸落書や落首、戯画戯筆の横行によって、やがて明治新政府は、戊辰戦争のあと巻き起つた自由民権運動に手をやき、明治八年八条にわたる「ざん誘律」の公布となる。この法令に違反したものは最高禁獄三月以上三年以下、罰金五十円以上千円以下などの量刑を定めた。つづいて新聞条令、集会条例の

弾圧令が続出し多数の新聞記者や民権運動家が投獄され、筆禍だけをみては明治十三年末まで三百四十九件にもおよんだ。

皮肉にもこの弾圧令は、民権宣伝歌や講談さては出版物における風刺の技巧を洗練させる結果を招いた。かくて、風刺雑誌の先駆的庶民言論の代表的存在として名高い「団々珍聞」の発刊となった。時に明治十年（一八七七）三月創刊号週刊紙で、毎号菊利14頁の内容は茶説・雑報・狂詞・狂歌・俚謡・狂句・川柳で、それにふんだんにさし絵、ポンチ絵がまぶされた。これらの絵画の印刷には、新規開発の金属凸版（銅版）が用いられた。

ともあれ明治十年代の自由民権運動などに大正デモクラシーによって漫画は、文句なく大衆のなかに力強い根を下ろした。

この「団珍」の成功により、同社から「驥尾団子」が出版されたのをはじめ、他社からも多くの絵入り戯文の類似誌が続出した。「妙々雑俎」「娯多く珍聞」「我楽多珍報」「文腹茶釜」「注心藏戯画」「鯨猫珍報」「面白誌」「転愚箱談」「傀儡師」「能弄戯珍誌」「月とスポンチ」等で、北は岩手から南は徳島まで、風刺雑誌の一大流行を来た。しかし、これらの風潮に対し「珍文類の弾圧条令」まで

生れたとあるから、いかに当局が手をやいたかがわかる。

初代川柳の昔から為政者の風刺句は厳禁だったが、その自粛ぶりの反面、幕府は浮世絵等の絵画に弾圧の重点をおいた。それはワイセツな春画より、政治風刺画に峻烈を極めた。いふなれば文盲の多い世間に、絵画こそがその真価を訴求力の点で遺憾なく發揮されたからである。「団珍」の絵は、開化の浮世絵師小林清親が活躍したが、その浮世絵風に一新紀元を画し新登場したのがいわゆるポンチ絵と称する洒落画である。この出現は江戸二百五十年を風靡した浮世絵の衰亡消滅を意味した。

これは余談だが、海外における浮世絵ブームの端緒となったものは、茶わん屋商法に由来する。すなわち明治も中頃、有田焼、伊万里焼の陶磁器輸出には、その商品の包み紙に使用したのが、二東三文の浮世絵草紙や大津絵のたぐいであった。江戸・大阪市中に氾濫していた黄表紙、洒落本に一枚刷の浮世絵などを片っ端から茶わん、さら、大鉢類の商品をくるんで箱に詰めた。大津絵などに至っては、街道筋の尻ふきといわれ、鑑賞などは二次の落し紙扱いにされていた頃である。

かくて碧眼紅毛の連中は、かんじんの商品より、見るからに艶治な浮世絵に魅了され、果ては茶わん、さら類どころではなくなったのである。ついにはこれ専門のコレクターや商人がどつと日本へと繰り込む始末となりはてた。現在、歌麿、国貞、北斎、写楽の国宝的、文化財的逸品の海外各国の浮世絵の保有作品の水準の高さは、国内所有の上をゆくものとして、わが国の識者を垂涎させているのは周知の通り。この浮世絵がロートレックやゴッホ、ピカソ級の自然派、印象派の各巨匠の画風まで一大影響を与えたことである。

こうした浮世絵の価値観に対し、わが国が手にした代償はラチもないポンチ絵であったわけである。横浜居留地の英人チャリー・ワグマンが、明治四年ころ「ジャパンポンチ」という半紙十二、三枚つづりの絵雑誌を出した。浮世絵とは比較にならぬ風刺的漫画で、この好評に仮名垣魯文が明治七年「絵新聞日本地」を出した。日本地はニッポンポンチの地口である。「団珍」はこのポンチ絵を採用した。浮世絵師清親は、ポンチ絵にならない多くの漫画を描きまくった。くり返すが、わが国浮世絵のこれが終焉だった。

# 誹風柳多留廿六篇研究

(三丁)

石田晋一・南得二・小野真孝  
本多正範・石田成佳・大屋六郎  
八木敬一・鈴木黄・多田光

故岡田甫

36 縄の入る盗人てなしかきつばた

石田晋 杜若の句に關しては、先に指摘されて  
いるように、その句の多くは『伊勢物語』  
第九段八ツ橋のものと、その「着想から来る  
もの」で、「盗む折るなどの趣向が見られる」  
ものである。これは業平の折句から「かきつ  
はたいたまぬやうに公家ハ折(一三五)」と花  
を折るの連想、花の枝を盗み取る人は花盗人  
とつづいていったのであろう。

「入る」は入り用とする、必要とするの意  
で、捕縄の必要な盗人でないのは杜若の花盗  
人である、が解である。

かきつばた盗ミませうとはめるなり

三四・8

はかま着たどろぼうも有ルかきつばた

天五鶴 1

腹からの盗人ハ来ぬかきつばた 五・1

小野 贊 花盗人も風流のうちという訳でし

よう。

多田 贊。

岡田 同。

37 浅草ハ高し音羽ハふとい猿

石田晋 浅草は金亀山浅草寺。その五重塔の  
丁度中央の三段目の屋根の隅、即ち仁王門の  
方に向った一角に角の生えた鬼のような面が  
かかっている。また、音羽は神齡山悉地院大  
聖護国寺で、その「外縁の左の隅の丸柱」  
に猿の顔のような猿柱があり、それをさす。

すなわち、浅草のは五重塔の高いところに、

音羽の護国寺には柱に猿がいるということに  
なるであろう。

また、同種の句として、

よし原ハいたし音羽ハかわいなり

八・7

があり、この句などを参酌してつくったもの  
と思われる。

多田 贊。

岡田 同。

38 草庵の返事に添る菊の花

石田晋 そのままの句と見たい。草庵からの  
返事には菊の花が添えてある、というのであ  
ろう。菊ははなやかさがなく、芭蕉の「菊の

香や奈良には古き仏たち」のように、静かでおちついたものであろう。

捨扶持の返事に尼は菊を添へ

明六六一

あわれさがただよっているのが、菊の花であらうし、それが草庵の雰囲気にあっている。

南二贊。草庵は草ぶきの粗末な家、本句の場合には隠遁者（世捨人）の仮住居、自然に親む風雅な心。

小野二贊。草庵とあるからには、丹精こめた大輪の菊ではなく、庭に咲き乱れた野菊の花であらう。

大屋二王朝。鎌倉時代は、手紙に花を添える場合が多いので、その延長線上の句と考えて良いかと思えます。

多田二贊。

岡田二同。

39 月に又ござれと柴の戸をたてる

石田晋二単なる月見で、田舎へ行ったときの句ともとれるが、吉原紋日の月のことか。

「柴の戸」がわからず。

南二「柴の戸」は柴でつくった粗末な門、訪問者を柴の戸まで送り出して、「何もなく、大変失礼しましたが、此処は町中と違って月が何より美しく、まあそれだけがせめての馳走です。十五夜には是非御出で下さい」とい

うところ。

鈴木二南氏説贊。俳句を思わせる句である。

しばの戸の月やそのまゝあみだ坊 芭蕉  
多田二同。今は世智からくて、38・39のような生活はできないかもしれない。

岡田二同。この句また、草庵。

40 けちな啼きごとと頼政引しほり

石田晋二『平家物語』巻四、頼政の鶴退治のあやしきものの姿を、

かしらは猿、むくろは狸、尾はくちなは、手足は虎の姿なり。なく声鶴にぞにたりける。おそろしなどもをろか也。

とし、謡曲「鶴」では、

頭は猿、尾は蛇足手は虎のごとくにて、鳴く声鶴に似たりけり

としている。頼政はこの鶴に似たものを「山鳥の尾をもてはいだる矢と滋藤の弓」をもって退治したという説話でこの句の解はなると思ふ。

雲ン中できやつと一ト声いふと落チ

安元義一

本多二贊。「けち」は怪事（けし）の転音で怪しい事、不縁起、しみつたれ、貧弱等の意があり、ここでは「しみつたれた」である。  
多田二贊。万葉集「貧窮問答のうた」にも、

「ぬえ鳥のどよひ居れば」と貧しさに悲鳴をあげているのにとえていいるのだから「けちな」といえよう。

岡田二この句のケチは、本多氏がいろいろな意味をあげられている内の、貧弱にあたる。大して驚くほどではない意。

41 おめかけの歌書細長い箱へ入レ

石田晋二大名や旗本の花嫁となるのは、百人一首を持参。この句の歌書は歌論や歌集、百人一首をさす。ところが御妾は、

おめかけの書物めりやす斗なり 七・2  
と長唄の本であり、また琴持参のところを、お妾は、

御めかけのけい元ト壘国の楽器 二〇・21  
と、三味線が芸であるところから、それを持参となる。

したがって、細長い箱、すなわち三味線の箱に唄本を入れて、殿におめみえすることとなる。

南二贊。但し、お目見えに限らなくてよいと思いますが。

御妾の歌書ハ二上り三下り

四三・15

本多二同。お目見えと限定する必要なし。

多田二お目見えに限らない説に贊。

岡田二同。

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

長野文庫

いたわりの言葉さみしく聞くことも

小出智子

「車中親切に席をゆずってくれた」「通行中  
お気をおつけなさい」といたわってくれた。  
ありがたいと思う反面、わが姿を顧みて、あ  
われさ、さみしさをひしひしと感ずるのであ  
る。ふと「風しようしよう」という言葉を連  
想したが、老いの哀歎だろうか。

目を血にしても一円だつて落ちていず

山内静水

このごろ、金の価値が無くなって、「一円落  
ちていても拾い手もない」と言うが、実際は  
減多に落ちていないのである。この句、単純  
なようだが、鋭い諷刺と解釈した。

せんぶりの苦さ愛用されている

工藤甲吉

「効き目愛用されている」でないところが  
名句である。上手な者を上手と言い、下手な  
者を下手と言うは巧みならず、凡庸ならずと

言い、巧者ならずと言う表現こそ大切。前句  
同様、人間諷詠の句である。

山男山から降りて渋滞す

香川酔々

「渋滞す」が輝いている。得々として登山  
の装備を見せ歩く山男、否、山男でない山男  
が沢山居て鼻持ちがならぬ。甚だしいのは釣  
道具をかついて女を釣り歩く男、ゴルフ姿で  
喫茶店を駄弁っているなどなど。

職のない日々を孫からあてにされ

阿萬萬的

孫からあてにされ、母親から疎外される現  
代の風潮を見る思いがする。「甘やかせ癖を  
つけて困る、甘いものを食べさせて不可ない、  
冷たいものを飲ませて腹をこわした、ろくな  
ことを教えない。」

職人の妻で直線的に生き

川口弘生

直線的の夫に対して、妻も直線的である。  
「あれ持って来い」という「あれ」が煙草で  
あったり、タオルであったり、財布であった  
りする。日常会話は単語ばかりで済みます夫に  
仕えるのに、女は「勘」で勝負する。

海行かば潜水艦にぶつかり

両川洋々

一億の落しものもある日本

川村映輝

落選のポスター笑顔持ったまま

小林由多香

世の中に似たような顔の人が居るように、  
似たような句があるとしても、名句は名句。

学資保険もう掛けてます哺乳瓶

市場 没食子

百科事典、勉強機械、記憶機械、カセット  
フィルム何でも有る世の中だから、生れぬ先  
から保険を買わされても不思議ではない。但  
し、二十年先の貨幣価値はどうであろうか。  
悠々自適くらしの中の春霞

水粉 千翁

悟り切った境地からしみ出たような句で、  
相当年期を入れた末の作品。

非行とは大人の真似をしる丈け

若宮武雄

名句というより「名言」かも知れないが、  
名句であり、名言であろう。かつて浜野奇童  
氏が「大人が鉛筆一本持たないで、子供に勉  
強しろ、勉強しろと言ったところで説得力は  
無い」との話をされたが、この句の通り、大  
人のやっていることを真似すれば大人はこれ  
を「非行」というのである。非行の防止は大  
人が生活態度を改めればよいので、至って簡  
単である。親が手帳と鉛筆を持って句作に精  
進している家庭から非行の子が生れる苦がな  
い。句作は子弟に無言の感化を与える。

恐いから医者へ行くのは明日にする

北勝美

私が医者へ行かないのは「血圧が高いから  
酒飲むな、煙草を止めろ」と言われるのが恐  
いからであり、眼科へ行かないのは「度を計  
ってあげるから、目に合った老眼鏡をかけな  
さい。」と押しつけられるのもいやだからであ  
る。

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

小林 由多香

燃え尽きるまで忠告は無駄のよう

本多 洋子

いま忠告をしても聞きわけけるような状況ではない、しかし先輩同僚として見過ごすわけにはいかない。熱の冷めるのを待とう。彼も馬鹿ではない。わきまえているはず。

草笛を吹くひとときは素直なり

満仲きく子

素直にはなかなか生きられない世の中である。せめてひとときなりと素直な心をとりもどしたものである。素直さを求める作者の素直な作品。

染みかくす化粧でさえも忘れがち

竹内花代子

美しくなりたい化粧を卒業、しみをかくすだけの化粧、それも卒業間近ののかも、忙しいのか、いやいやそっではなさそっである。でも美しく歳をとりたいもの。

たわいない噂に風も笑い出し

奥山美智子

くだらない噂、まに受ける人がおかしくもなる。風も笑い出し、とうまい表現で楽しい川柳に仕立てられた。

下駄箱にならんでいるは靴ばかり

桑原 掬治

めっきり下駄履きが見られなくなった。下駄が入っていないくとも下駄箱という。ゆかたがけの夕涼みといった姿がなつかしく想い出される。

珍客へ目刺しの匂いまだ抜けず

渡辺伊津志

目刺しを焼いた匂いがなかなか抜けない。昔は安い庶民的な匂いであったがこの頃はけっこう高いもの、珍しいお客様だとてちつともはずかしがらなくてもいい匂い。

書き物へ孫ちらちらと顔を出し

鈴木 可香

締め切りの迫った原稿。かわい孫の相手もしたい。書きかければまた顔をのぞかせる孫、来ても欲しいし、来てもらっては困る気持ちがあうまく詠まれている。

マネキンを脱がせた柄が似合わない

中谷 利美

迷いに迷ったあげく決めた柄。マネキンに着せてあったいい柄、きつとみなから注目される柄であったと思うのになにかしっくりしない。おもしろい着想。

よっぽどの事母さんが嘘をつく

渡辺 南奉

私の句に「うそいえぬ母へ約束多すぎる」

があります。母さんは絶対嘘をつかないと信じていた。その母さんが嘘をつくなんてほんとなによっぽどの事があるに違いない。

年頃になると大人がずるく見え

有働 芳仙

大人がずるく見えるようになったことは、それだけ自分も大人に近づきすぎることだ証拠である。いろいろ反抗したり、口答えが目立つようになった年頃。

初対面犬足をかきに来る

平井 露芳

よく見かける情景。あいさつを交わしている足をかきようにして来る。犬の習性であるろうが特に犬の嫌いな人にはたまらなく怖いものである。

父も子も働いていてなお赤字

山下みつる

働ける者は働いていての赤字。そうぜいたくもしていないはず。まだまだ値上げがつづきぞう。一体どうなることやら。主婦の悩みがうきぼりされている。

向い風優越感の子が走る

津山 刀水

うしろから見れば善人にも見える

片山 明水

後手に閉めて思案が先を行く

杉浦婦美子

裏までは知らぬ笑顔かそれよし

松本はるみ

以上の句もなかなか着想、表現ともうまくまとめられている。

# 水煙抄

## 正本水客選

岡山市 原田 凡太郎

久し振り大阪弁の中を行く  
噂など歯牙にかけない娘に困り  
長い眼で見てもほしいのに怒り  
コップ酒隣りも過去を恋しがり  
ちぐはぐの夫婦と自認して平和

八尾市 高杉 千歩

父の日よただひたすらに父恋し  
ジャンケンに負けて駅まで雨の径  
はつきりとさせる言葉を辞書でひく  
憧れの人のベレーへ銀の雨  
一徹な男の無口不戦勝

大阪市 津山 刀水

正直に生きたい肩をたたかれる  
貧しさを口には出さぬ父と知る  
玄関ほど幸せてない勝手口

銀行は貸さぬ口実も持っている  
半分は私に聞かす気で叱り

今治市 矢野 佳雲

出世した音で困地を引きはらい  
陽が当りやつとわかった石の位置  
味方から聞いた予想が甘すぎる  
砂浜の広さ走ってみたくなり  
裏見せぬ柱時計が信じられ

尼崎市 奥山 美智子

快い夢が脹らむふとん干す  
わだかまり流せ流せと雨が降る  
人妻の焦りは風へ捨てにゆく  
埋み火は思いを溜めたまま消える  
ほんのりと香水つけて夏祭り

高槻市 竹内 花代子

真白なサツキに花の精を見る

魔女が乗る箒が欲しいなと思う  
偽らぬ顔が浮いてる洗面器

木洩れ陽へ苔それぞれの色を見せ  
趣味変えて五十の坂を翔んでいる

豊中市

満 仲 きく子

麦笛を吹いて夕日の地平線

人形は答えてくれず失意の日

さくらんぼ色の口紅買う薄暮

命枯れる日までの月よ陽よ星よ

甘えるのと甘い考えとは違う

青森市

工 藤 路 子

人事課の電話へちよつとあらたまる

けちくさい主婦になれない家計を見

デパートで野草も虫も買うてくる

ポーナスの税金少うしまからぬか

愚痴るときも楽しいことも母の墓

弘前市

田 中 叶

子と遊び帰る義弟に職がなし

かくれんぼ追えば鶏ついてくる

五月の陽金魚の死骸棄ててあり

大臣の色紙悟ったことを書き

衣食住足りて蒸発した女

大和高田市

岸 本 豊平次

毎朝に同じ願いの手を合わせ  
親に似ぬ頑固を頼もしくも思う

帰る気かコンパクト出し顔なおす  
アルバイトだから苦にせず汗流す

旭川市

朝 倉 大 柏

忘れもの笑えるほどで安堵する

自由とはいえ腹の立つ子の理屈

サングラス仲間意識が掛けさせる

へナへナとブーツが折れている疲れ

高知県

松 岡 三 吉

大阪の女よく食べよく喋る

彫りのふかい女が外車から降りる

じっとして居ても十二時飯にする

おしほりで女は手先拭いただけ

西宮市

朝 山 千世子

梅雨に入り友から貰うバラ挿し芽

生命保険満期 趣味に健康支えられ

五月晴れ娘から届いた豆御飯

盆梅の実一つ姑は孤独に耐えている

京都市

松 川 芳 子

下校時の満員バスに無視される

足ることの幸せ知らぬ育ち様

嘘八百たった一つの嘘に泣く

無理をして歩いてるらし母の癖

羽曳野市

麻 野 幽 玄

母さんの都合で寝かされてる子供  
マネキンを二人掛りで脱がしてる

マンホール覗けば動くヘルメット  
デザインは良いが読みとれない時計

寝屋川市

稲葉好子

一人居る部屋に泣き虫が動き出す

幸せの向い風は苦しみと知る

横車入れる夫のない気まま

その壁の向う知りたくない嫉妬

大阪市

稲本凡子

働ける幸せ多忙をグチるまい

さびしさにたださびしさに歩くのみ

前の人に歩巾合せている闇夜

原色を着て現実に遠くいる

尼崎市

丹下玉子

子育てのトンネル抜けて趣味の道

寄せ書に幸せと書き面かぶる

大人への遮断機上げる父の顔

年回が近付き家中改まる

吹田市

西川景子

ピアノ弾くタッチで乳房検診し

着やすくて敵みたいてに着るセーター

大輪に咲いて香りのうすいひと

一年で笑い話になる手術

島根県

松本はるみ

引きずって来た殻その時どう捨てる  
文化財にされてうごけぬ棕櫚ぼうき

駒下駄の足になじまぬ俄雨  
犬と佇つ鴨背をむけて水を切る

大阪市

山田松太朗

子が親に関係ないと何を言う

ロボットと人間同じに扱われ

人間にパンダも飽きて欠伸する

まん中に居るから何時も狙われる

西宮市

妹尾春江

父と子の対話をつなぐ風呂場の灯

ひと言が支えとなつてついて行く

悲しみがあるので傘をふかくさす

裏口から亡母によく似た声がある

尼崎市

中谷利美

お迎えが遅いと待ってる訳でなし

峰打ちにされたと知らぬ慌てよう

サラ金ほど銀行信用して呉れず

入院と決まり病人らしくなり

鳥取県

加藤茶人

聞き役のひとりで相づちなら打てる

くもり後くもり倦怠期の小言

妻のエゴ子のエゴ少し金がいり

左右よし老いの一步目から遅れ

西宮市

林はつ絵

蝶の羽根止っていたら重くなる  
母の日におばあちゃんにもプレゼント

まん中に児が寝て虹の夢を見る  
妻と母秤揺れない位置に立つ

岐阜市 市川 鱈 魚

鶴飼船鮎に哀しい櫓を叩き

打ち明ける涙を母にいたわられ

どんな聖書よりも母からきたい事

きつと飛ぶ一羽を希う千の鶴

名古屋市 越 村 枯 梢

日銭じやらじやら今日の稼ぎはこれつきり

父子相伝貧乏暮しに馴れている

パラボラの向きそれぞれに夏の雲

このままでよい このままでよい風静か

大阪市 西 村 芙佐女

もめん一丁 手の温もりのある豆腐

唐津平戸ひとり旅

旅にいて妻は夫の茶碗買う

肌匂う水軍太鼓にほれてみよ

太宰府の梅 妻の初心と見えてくる

兵庫県 中 田 白 李

山小屋で料理のコツも習うてき

舌だして恥をペロリとなめつくす

男の子だから大きな声で泣く

折込みをたんねんに見るも趣味

大洲市 米 沢 暁 明

旅終る孫の土産を買い足して

村長を早退させた基友達

首謀者にならずにすんだ気の弱さ

大臣の眠気 茶の間で見てしま

大阪市 杉 本 智慧子

養殖の若鮎すこうし肥り気味

青畳部屋の空気も改まり

雨に煙る睡蓮私は夢を見る

珈琲を少し濃いめの午後がある

堺市 田 辺 哲 寿

的を射た野次が悲劇を喜劇にし

計算が名刺の下から覗いてる

酒薬交互に飲んで若死にし

願いごとばかりに神様呼び出され

大阪市 大 野 武 太

逃げ道をあけずに論破する怨み

愚かさを嗤う鏡に自我うつる

したたかな男倒産気にしない

セールスに惜しい文才ちらつかせ

岸和田市 吉 水 照 江

断髮式親方と云う顔が出来 (貴の花に)

古茶碗夫の形身で捨て切れず

土地広くローンもいらな

機械化の田植え情緒もなく終り

岡山市 松 本 元 江

追憶の中で故郷が詩になる

それぞれの温みを持って寄る夕べ

自画像に私の色がまだ塗れぬ

ああ今日も私の色が探せない

西条市

片山明水

狙い球絞れぬままに壇に立つ

油虫脚を残したままで逃げ

買ってきた順に卵は座らされ

補聴器を叱る言葉に間を置いて

大阪市

村上喜代美

ボールの様に受け渡しする西瓜

磯釣りの帰りは泳いで渡って来

父母の墓太平洋に向けて建て

川の字に孫と寝てみる老夫婦

唐津市

田口虹汀

点てて飲む只それ丈の茶碗です

気の置けぬ客と五月の茶を啜る

羊羹の好きな姑で茶を点てる

蠅叩き持てば蠅までいなくなり

鳥取県

武田照子

えんどうの実いっぱいに子への思慕

解決がついなら桜散って居り

失敗を消してくれないボールペン

熊本市

有働芳仙

人形を並べかえても独りかな  
もしひよっと死んだらという身の整理

考える人のポーズで見るマンガ

旅のあか洗いと落として茄子の色

水たまりひよいひよい跳んで雨上り

逆らって見たい夫の二日酔

巻ずしを食べてるうそのない顔で

アイスクリーム食べる大正という手つき

出勤の靴まん中へ揃えられ

地方色地味に生きるを良しとせず

乾杯は無事到着の大広間

窓あけて唄をわすれた鳥放す

野良犬の意地 人間に背を向ける

ペンネーム知ってて本名まだ知らず

穴を出た蛇 木登りを試みる

倉吉市

今村夕路

孫があるなど見えない白衣着て

宝鏡寺 人形のほかは無縁なり

叡山の借景で生きてる円通寺

羽曳野市

佐野白水

アウトライン男 敵とも味方とも

目覚しが狂って男絵にならず

模造ダイヤ信じ切ってる幸せよ

鳥取県

和井観洋

兵庫県

円増貞子

交野市

山本テルミ

島根県

岩田三和

唐津市 浜本 久仁於  
もう一度不幸がしたい母の墓

暁を逃げ遅れたる昼の月  
気前よく判こを呉れて天下り

尾鷲市 渡辺 伊津志

万両を食べる小鳥の瞳と出会い  
さまざまの誤解の中のニラメッコ  
益のない記憶を邪魔にして生きる

岡山県 池田 半仙

環境に合わぬ気骨と蔑まれ  
妻が病む負われていたと判りかけ  
根回しが効いて苦情が遠慮する

名古屋 鈴木 可香

洗濯もの溜めて独身寮の雨  
母若し刈り上げにしたほんのくぼ  
湯上りへすつきりとした今年竹

大阪市 橋元 美恵

小猫には貴方の名前付けました  
広接間バラ三本に隙がない  
ドック入り乳房も髪もうとましい

尼崎市 中辻 千子

春うららなにを急ぐの馳け足で夏  
批判する前に私を見つめよう  
大陸のみどりを日本に欲しい地図

東予市 小山 悠泉

かくす気は無かった等と裏で金  
どん底で鳴らない鈴を振って見る  
風鈴の音儲かっている夜市の灯

島根県 堀江 百代

母の声 電話はいつも風邪ひくな  
散歩から帰れば味噌汁待っている  
はしり雨浮かない気持で空を見る

島根県 松本文子

同情をすれば迷惑顔をされ  
蛇の目傘雨も昔の音で鳴る  
ふるさとの味を隣りへおすそ分け

唐津市 山下 勝一

戴帽を脱いで赤旗振る天使  
完全看護その中にある不自由さ  
失業をしても赤ちゃん生れて来

鳥取市 森田 熊生

もしもしがチョッピリ言えた電話口  
結果から言えばなるほど右へ行き  
池で冷やしたビールがうまい妻の里

大阪市 山本 炉斉

赤いバラ花瓶の心よるこぼせ  
風鈴草風に靡いて音立てず  
コマーシャルソングを孫に教えられ

東大阪市 坂本 喜洗

憎まれぬ年寄りらしく腰を曲げ

初孫に若いお祖母ちゃん一寸照れ  
外孫が食膳前で手を合わす

大阪市 堀口 欣一

大阪の夏をやっぱり冷しあめ  
丸髷の母に抱かれた人力車  
京都から奈良へ廻って暑い夏

兵庫県 森脇 和子

メモ帖に亡夫の確かなペンの跡  
ふん水の高さへはずむ童唄  
青畳楽しい夢が見られそう

米子市 野坂 なみ

バランスが崩れ野山にみどり褪せ  
大物がはねれば魚籠の雑魚迷い  
つき当る壁へ泣きたい休みたい

高槻市 田崎 あき子

記念写真まず真ん中へ祖父母置き  
雨だれへ牧水の歌ふいに湧き  
チヨークの粉浴びた教師を懐しむ

大阪市 日阪 秋子

諦めた芽を見る春のたのもしさ  
有線の曲に浮かれてシヨッピング  
僕 僕と老人未だ気が若い

八尾市 宮崎 シマ子

無人売店の筍ひと節延びている  
まあ聞いての声に付き会い小半日

弱るのはわかるが用もないのに歩かれず

鳥取県 羽津川 公乃

肩書を並べ会長孤独です  
息ぬきの喫茶へボケットベルが呼び  
キラキラと輝く青春突走る

島根県 岩佐 富子

洗い髪みどりの風がさわやかに  
雨の音耳に湯船のひとり言  
背なの子にはずんで見せてる鯉のぼり

奈良県 宮川 古都路

四季咲きのバラ一輪の日向ぼこ  
用心棒おんなの影で息をつめ  
うばら垣若芽の毛虫箸でとり

島根県 星野 侑正

寛容の微笑だけではすまされず  
無礼者昔は手討ちにされるとこ  
父の日に退院出来たを目出度がり

唐津市 仁部 四郎

次の会俺も素早く別の貌  
責任の外でつきあう他所の孫  
駆け足のままで兵卒草の肥

松原市 本多 洋子

はぐれ鳩意地を張らずに帰ろうよ  
花菖蒲かきわけ蛙が顔を出す  
風うけて黄菖蒲 花と花を寄せ

街頭署名すんでカンバと金取られ  
寝不足のよく寝た奴に腹を立て

大阪市

平井露芳

静脈が青く潜んでいる薄着  
通学の列車の中だけ勉強し

唐津市

桑原掬治

不発弾抱いたままなる父の背な

大阪市

鍛原千里

美食後のトイレにも似た離婚劇  
生きる知恵野良犬を信じない

兵庫県

山根左春

おから煮る女の横顔聖母なり

八戸市

島田昭治

母の愚痴孝行のつもりで聴いている  
花好きな母と妻とを妬いてみる

島根県

福岡芳枝

結論を酒の強さに左右され  
なに気ない仕草に育ちの香りする

兵庫県

野々口ゆう也

口だけの信心 木魚もそんな音

岡山市

串田句味地

捨て石になる幸せの歩を刻む  
誉められた言葉に乘れぬものを知る

兵庫県

藤原捷一

あの頃は楽しく歩いた雨の中  
山菜も摘み放題の村に生き

和歌山市

坂部紀久子

凸凹をならせば世間つまらない  
まだ死ぬぬ人の悪口面白や

今治市

八塚三五島

三十年連れ添う妻の寝息聞く

神戸市

久保禎三

孫寝てるいい夢見てる笑ってる  
嫌なこと我慢する気のない歳で

尾道市

八木秀水

待ちかねた春 駆け足で通り抜け  
娘三人まん中の娘が家を継ぎ

兵庫県

伊沢午郎

会場はここかと上向く五階建  
会長の交代ウォーミングアップ始め

鳥取市

武田帆雀

障子越し姑の小唄に耳すます  
幾年か無沙汰の姉の墓に竹ち

兵庫県

奥野テル

月が出てあと一筋や田草取り

米子市 田中亜弥

青森県 岩淵一星

彫り師の瞳 非情なまでに肌をさす

筍が頭そろえる山の墓

青森県 波 ただお

銭湯は二一〇円の社交場

若人の張り切る声がこだまする (県高体連)

唐津市 浜本義美

お得意の連れに昼食奢らされ

コンテナ―中流意識のゴミを呑み

樺原市 西本保夫

囑託の意見は矛盾ついている

意地捨ててつくり笑顔にすぐ戻る

倉吉市 田民碧水

席譲る親切緑の風乗せて

親切なお巡りさんは子に好かれ

松原市 佐藤藤子

だんだんと動物臭くなる都会

一輪が優しシャッターそつと切る

大阪市 朝倉利義

マニキュアの爪が重たい十六歳

両隣りの増築改築気にかかり

八尾市 山下みつる

宴会の数をこなして管理職

ミサイルの発射台より鳩とばす

浪人のたまに晩酌遠慮する

今治市 新居田 胡頹子

減反に減反軋む耕耘機

老いらくの恋で孤独を温める

大阪市 斉藤 きくみ

子や孫と住みたい慾はまだ捨てぬ

夏の日に燃える若さがうらやまし

浜田市 中川 幸一

餌だけは食うて栄螺は殻の中

息のあるうちに欲しいな保険金

高知県 山下 登舟

蔭の葉をコップがわりに清水汲む

日傘などさせぬ人出のユートピア

浜田市 佐々木 裕

今日の嘘明日の嘘へとつなぐ嘘

ジュエチャーで見せた演技の浅い底

山口県 高崎 喜一

集って蛙は雨を呼んでくれ

祈りでは法王やはり守られず

島根県 藤原 鈴江

古木にも春の女神は芽を給う

来し方を芍薬の白に洗われる

大阪市 林 ひろ子

好きな人俳優に似せてのろけてる  
新緑を顔に映して行く女

寝屋川市

立床晴風

嫁姑 動と静とが解け合わず

公定歩合縁の無いのが試算する

泉佐野市

大工静子

体質は四角四面をはみ出さず

石の上にも三年と云い末だ三月

鳴門市

八木芳水

内孫の嘘を承知で謀られる

法の裏正直者に遮断され

兵庫県

山崎忠夫

駆け足で通り抜けてるのれん街

田の中で立てば仕事になる案山子

奈良県

植村大寛

子供らの宝探しはかぶと虫

立札にカブト買います登山口

大阪市

泉田そとゑ

満月に見惚れてくさめ一つ出る

東大阪市

三宅哲夫

退屈な膝と知ってる仔猫くる

大阪市

村島秀村

ひい孫を孫と云つとく洒落気持つ

河内長野市

糸谷春草

再婚をしない女の素足見る

酒呑んで送られる日に出る本音

新潟県

高野不二

古い深し床屋の鏡うとまれて

唐津市

木塚素石

太いのが心配になる中年期

和泉市

岡井やすお

破れ傘山男にはよく似合う

奈良県

植村直木

## 第5回 全日本川柳大会 受賞作品

(56.6.21)

☆文部大臣奨励賞

日の丸のほかに知らない旗を振る

東京 白倉 寿夫

☆川柳大賞

整列の姿が悲しい兵の墓

福井 高木 一男

☆大会賞

数え切れぬ星を数えて馬鹿になる

金沢 奥 美瓜露

父となり母となり川 村を縫い

東京 山本六道郎

写楽のように姿を消してみたくなる

宮崎 本田 南柳

妻の手に鮎一匹の命みる

金沢 小西 正粹

最大のスリル結婚するといふ

富山 辻本 俊夫

# 愛染帖

## 橘高薫風選

東大阪市 市場 没食子  
老夫婦浴衣の藍のように刺け  
目耳鼻にぶり味また減塩で  
米子市 八木 千代  
花あまた殊に烈しく白が咲く  
たましいは天に残して流れ星  
青森市 工藤 甲吉  
夏雲のほかに八月キノコ雲  
霞ヶ関辺り毒ッ消しやいらんけい  
鳥取市 河村 日満  
ペーパーミントは濃みどり男運うすき  
盛装しても喪服にかなわぬ  
和歌山市 浦野 和子  
六月の山へ魔法をかける月  
キューピットの矢の痛みなら打たれよう  
大阪市 河野 君子  
ころろ盗られているにはあらず物忘れ  
サングラス容易く翔べるわけでなし  
旭川市 朝倉 大柏  
前列の笑わぬ一人だけが見え  
掃除婦がスパイのように社を語り

八尾市 高橋 夕花  
住きことで傘をぬらした日の多し  
ひと区切り出来ず六月過ぎてゆく  
大阪府 小出 智子  
裁縫箱もときには愚痴が言いたそう  
沓脱ぎの位置でピンと合っている  
和歌山市 西山 幸  
落日の海に杜子春佇っている  
鎮魂の海の底から琵琶の音  
兵庫県 遠山 可住  
今朝歌う楽譜決まらぬ小鳥二羽  
おとなになりたいこともでいたい楽しけれ  
富田林市 岩田 美代  
真つ赤な釦がひとつ砂浜に  
待ち呆けばかりで噴水疲れたり  
唐津市 新岡 回天子  
やかましいなか手話だけが通じてる  
次男ばうお前が居たらと思つ日日  
寝屋川市 柴田 英千子  
一児得し姿態妖しくカムバック  
片方のガラスの靴が城にある  
羽曳野市 麻野 幽玄  
お幸せですかと想い口に出し  
貧しい頃の味はもうない卵焼  
倉敷市 水粉 千翁  
雨もりの音と真昼のひとり者  
義侠心丸出しにしている傘  
高知市 西川 富恵  
陽は真上ひたすら歩く旅人は  
花散る里むかし昔の糸を繰る  
唐津市 山下 勝一  
原子にも馴れて岬は麦の秋  
思い出も消えた女と遇う夜半  
守口市 村田 瓢太  
血の繋りがあるばかりのうとまじさ  
これこんな小さな苦にも花が咲き  
堺市 高橋 千万里  
悟られてならぬ鼓動に透ける服  
野心家に軒をかしたが運のつき  
島根県 榎原 秀子  
さわやかな五月プリンの舌ざわり  
かりそめの王者部屋部屋花で埋め  
大阪市 杉本 智慧子  
ミニ鉢で育てた花はミニサイズ  
額の中で生きているよな錦鯉  
大阪府 欄 蘭  
雑草の大地掴んで放さない  
高知県 赤川 菊野  
愛憎の愛だけ遺る仏間の灯  
鳥取県 清水 一保  
人間をじっと見つめる花の顔  
島根県 堀江 正朗  
夢ほどに淡く点滅する昔  
今治市 月原 宵明  
取り巻きがそつと定めた辞世の句  
松原市 本多 洋子  
貴婦人の舞踏会かや花苺蒲  
高槻市 若柳 潮花  
ペンダント父の胸毛に眠る亡母  
京都市 松川 杜的  
枕慈童仙童が舞うて菊が散る  
鳥取県 羽津川 公乃

狂い咲く花の奔放嘯がない

今治市 矢野 佳雲

カルシウム不足でカニが足を折り

松山市 谷 真風

草木の栄えが老いに迫り来る

岡山市 原田 凡太郎

何もせぬ髭をむなしくなつて剃り

兵庫県 辻 文平

野仏に見られてしまふ綱渡り

唐津市 岩崎 実

若者の車が増えて夏に入る

唐津市 仁部 四郎

ネオン川男なかなか浮上せず

富田林市 中村 優

売るだけの花屋虚しい花言葉

神戸市 久保 禎三

退くと見えて踊りの輪がすすむ

青森県 岩淵 一星

香典と書くたび頼る人が減り

宝塚市 吉田 笑女

心配の種はぼろぼろよくこぼれ

町田市 竹内 紫 鏑

脂気が失せた手で練る大辞典

守口市 羽原 静歩

夏木立金色堂に数珠光る

米子市 政岡 日枝子

逝くさわの無意識嫁の手をさける

笠岡市 木山 遠二

齡ゆえか妻より涙もろくなり

岡山県 荻野 鮫虎狼

しまい風呂自分の匂い確かめる

岡山県 荻野 鮫虎狼

出雲市 園山 多賀子

かくし味そんな立場の祖母であり

山口県 高崎 喜一

植樹祭一方木を切る山が見え

大阪市 川口 弘生

コロンブスの卵の味の初体験

尼崎市 奥山 美智子

手に肩にインコの青の満ち足りぬ

浜田市 中川 幸一

雨だれのリズム乱して雨上る

兵庫県 直原 七面山

愛情が零れ落ちそな娘の項

寝屋川市 稲葉 好子

妻の座も母の座もない割烹着

岡山県 岩道 博友

寝た振りをしていたらしい叱り方

高知県 山下 登舟

若葉風裏迄見える診療所

岸和田市 古野 ひで

山里にみどりの風と飯飯

兵庫県 速水 房子

雨晴れて思案にくれるカタツムリ

今治市 越智 一水

名の知れぬ花が誇りを持って咲き

岡山県 嘉数 千代香

あきらめて沈めば石のやすらぎよ

八戸市 小泉 紫峰

そこまでは心許せぬ夜のグラス

熊野市 坪田 冬花

見て聞いて話して自分の嫁をきめ

青森県 五十嵐 操史

乾杯にジュースの組がちと遅れ

岡山県 稲岡 正之

仏心も鬼も抱いて独り旅

大阪市 清水 健司

四面楚歌山は静かにねむってる

島根県 西村 早苗

喋れないされど確かな指をもち

島根県 木村 はじめ

振り向いて風は慰めず去った

鳥取市 両川 洋々

巨悪斬るベンだ錆びさせてはならぬ

唐津市 桑原 掏治

古歌で知る千鳥はきよも渚にて

平田市 久家 代仕男

個性強すぎて仇花ばかり咲く

倉吉市 奥谷 弘朗

節約で足りる暮しが性に合い

岸和田市 島崎 富志子

中流の女中流の愚痴を言う

和泉市 西岡 洛醉

ランドセル孫一代の澄まし顔

大阪市 中西 兼治郎

誕生日日歴史繰り返し

高根県 小砂 白汀

先輩が一味ちがう鞭をくれ

今治市 八塚 三五島

弁当を豊葦原の畦で食い

和歌山市 松原 寿子

好きだから蓮の白さを妬りぬ

米子市 林 瑞枝

野は茂り乳房のルーツさぐる雨

林 瑞枝

米子市 小西雄々  
泥舟で渡る人あり川よこれ

米子市 菅井とも子  
ファイナーレのしびれを抱いたまま帰り

京都市 都倉求芽  
レモンしぼる指は家事などしない指

東中市 小山悠泉  
サングラス位で正体かくされず

和歌山市 内芝登志代  
地平線今日の悩みを棒に引く

米子市 桑原伊都  
格子戸の街へ友禊彩をそえ

大阪市 西森花村  
PTA生徒の顔は覚えてず

米子市 田中亜弥  
ジャンケンの勝ったあとまでも続け

豊中市 満仲きく子  
バス揺れる膝の小箱にさくらんぼ

兵庫県 森脇和子  
網棚へよく似た土産の旅帰り

室戸市 岬風子  
別別の夢がグラスで揺れあつて

大阪市 村上喜代美  
母の納骨やがては自分も子に抱かれ

岡山市 池田半仙  
風はなの弁当生きた味で食う

岡山市 松本元江  
うきうきと私の好きな風に会い

貝塚市 行天千代  
亡夫思ふ今年も父の日巡りくる

高槻市 田崎あき子

手配書の正直な顔哀れ増し

大阪市 大野武太  
敵前逃亡僕に責める資格はない

米子市 青戸田鶴  
霊峰の素顔みつめた登山靴

大阪市 津山刀水  
パーセントでいう天気図を猫視く

兵庫県 中田白李  
余白まだわさびの効かぬまに過ぎ

京都市 山本桐下  
ちははの身になり戸籍簿に触れぬ

倉吉市 田民碧水  
身よりも他人ともなる舌の先

鳥取市 武田帆雀  
道化師のおちよほ口に芸がある

寝屋川市 宮尾あいき  
化粧品女の体臭浄化する

西宮市 妹尾春江  
雨の日も少し距離おく父と母

米子市 寺沢みどり  
踏みわけて山ふところの深さ知る

宇治市 黒川秀義  
妻の云う私の内助忍一字

桜井市 谷口梨郷  
落書は睨む仁王の眼を盗み

高知県 山下登舟  
一匹の蜂に運座は繰くずれ

奈良市 森田カズエ  
すすくと伸びた土筆で摘ますおく

三原市 戸田富久子  
らしく生きらしく過して不可もなし

西宮市 朝山千世子  
アメリカに振り回されて核不安

米子市 石垣花子  
敗戦の言い訳もせぬ頬がぬれ

唐津市 田口虹汀  
釈尊の小さい像にある威光

兵庫県 奥野テル  
記念樹の松金婚へ緑濃く

米子市 雑賀美世  
愛用のペンは温みを離さない

島根県 福岡芳枝  
母の味笹に巻かれて京に行く

岸和田市 福島せつ子  
目の前に師の色紙あり句想ねる

★ 豊中市中桜塚三丁目13-15  
橘高薫風(ハガキに3句)

### NHK川柳募集

課題 「手紙」 選者 橘高薫風

締切 8月10日

(ハガキに三句以内)

投句先

大阪市東区馬場町6-4 NHK  
大阪放送局 老後をたのしく係

発表

8月22日(土) ラジオ第一放送  
午前9時15分から

## 小西無鬼さんを悼む

### 弔 辞 西 尾 葉

謹んで川柳塔社参事、故小西無鬼さんの御靈にお別れの言葉を申上げる哀しいことになりました。

承りますれば心臓が段々衰弱なされ、お苦しみもなく静かに眠るがようにお旅立ちなされたとの事。貴方さまの平素のおやさしいお氣持の通りの大往生だったと拝察して、悲しいうちにも、淋しいうちにも、何かしら一抹の安堵を得た思いでございます。

少し足が弱くなられたということ承っておりまして、一度お見舞に上らねばと思いつつ遂に取り返しのつかぬ今日の日を迎えてしまいました。

私は今、昭和四十八年八月十八日篠山荘に於て、ビールのグラスをもってニコリ笑っている貴方と私の写真を前にして、このお別

れの言葉を書いております。その写真の下には『吞み仲間どちらも髭をはやしてゐる』という一句が書いてあります。今からちょうど八年前、貴方はこんなにお元氣でした。デカンショ祭にお邪魔した時、岳人君が撮してくれた楽しかった一夜のスナップです。貴方も私も本当に酒が大好きでした。あなたの句に

酒に生き酒で逝つたと言うとくれ

血圧を薬で下げて飲みつけ

等、お酒の句がございます。貴方もさぞ御満足のことだったでしょう。

昭和五十四年七月に、ささやま三〇〇号を記念して、句集「ささやま」を発刊されました。その時、私は序文を書く光榮に浴しましたが、その書き出しに、

篠山は、今でも兵庫県多紀郡篠山町である。町ではあるが、そんじよそこらのインスタントにふくれ上った五、六万の市と違ふ。立派な格式のある町である。反骨精神の漲る町である。青山氏五万石の城跡もあり、閑静な武家屋敷もある。云わば伝統の文化をもつお城下である。と書きました。

篠山の風土は、小西無鬼さんの御性格に一脈相通する町で、あの御年齢で合同句集「ささやま」を発刊された精神力と統率された和やかな心配りは、当然のことながら全く頭の下がるものであります。

貴方の川柳に対する御貢献は一々枚挙に遑りませんが、川柳篠山城の城主であり、老人大学の講師であり、その他諸々の会長であり、理事長であり、総代でありました。

表彰状の数々は数えきれませんが、最後に兵庫県・ともしび賞を昭和五十二年十月に受けられて、その欣びの報告旁々、麻生路郎先生の奥さん段乃先生を生駒に御不自由な脚でお訪ねになられた律義さには感激したものであります。

その段乃奥さんも、去る四月二十四日、八十九歳の御高齢で歿されました。今またあなたはそのあとを追うようにして不帰の客となられました。この淋しさ、この哀しさ、

どのように表現したらよいのでしょうか。

貴方が丹波の地に蒔かれました川柳の一粒の種は、今や、すくすくと育成されています。その御業績に對して、まだまだ申し上げたいことは山程ありますが、心ならずも之にてお別れ致します。最後に、貴方は筆の字が大変お上手で巻紙のお手紙を沢山頂いておられます。末永く大切に大切に殘して貴方をお憶ひ申し上げます。

無鬼さん、何卒心安らかにお眠り下さいませ。無鬼さん、さようなら。

昭和五十六年五月二十八日

川柳塔社同人代表

副主幹 西尾 栗

まなじりも

口もともよし 猪口の君

栗

嗚呼

賢良院温誉正心直道居士

遠山可住

丹波篠山に川柳の灯をともし、川柳文化を

地域に育てあげた小西無鬼先生が忽然と逝去された。初夏の風に若葉の色増した山々が、すっぽり闇に包まれた五月二十六日夜九時五分、大きな大きな星が丹波の空から消えた。

地域に向つての川柳の普及第一声が昭和二十九年一月の新春川柳大会、以来一回の休みもなく誌齡三百二十二号の今日まで、丹波地方で先生に川柳の心を教えられ育くまれた人たちは三百人を越えるだろう。そして又、その灯をこれから何百人もの人たちが心の糧として生きて行くことだろう。

路郎を師と仰ぐ先生の川柳は川雑から川柳塔と一筋の道を、いささかのわき見も許さず人間陶冶の詩をかかけ

古くとも僕には仁義礼智信を心としてその作句指導はかたくな程嚴格であつた。

五十四年七月、句報三〇〇号を記念しての「川柳ささやま」全頁句集の発刊は、期せずして川柳作家「無鬼」の生涯を後世に残す唯一のものとなつた。

路郎師の誕生日を記念する川柳祭が毎年行なわれて十年間続いた。その川柳大会に篠山支部は二回も優勝権を獲得した。五十二年秋には兵庫県ともしび賞を受賞された。いまふり返ると、この師にして一つの句碑もなく一冊の本も残されていないことに気がつく。

神槌を鈴で起して頼んどき

一ト飛びを蛙熟考してのこと

酒に生き酒で逝つたと言うとくれ

酒と川柳を伴侶として歩いた七十七年の人生、渡る世間に鬼は無い、これを無鬼と号したという、人間無鬼の骨頂かもしれない。

言葉匂う峰

どの峰も恩師の碑

小西無鬼師を悼む

河原みのる

巨星墜つた。突如無鬼先生の訃報に、愕然と大空に穴があいた様な虚脱に打ち拉がれました。

俗に虫が知らずと申しますが、僅か半年前に支部句会に出席され、久しぶりに席題の選もされました矢先でしたのに。

一会（いちえ）という語意の重さがこれほど胸に応えた事はありません。告別式の日は天も悲しむか、しめやかな小雨でしたが、回向の人々きびすをついで、故人御生前の遺徳の程さもありなんと偲ばれました。

式は、先生の社会的功績とお人柄を称える町内代表の弔辞、支部ひか平氏は川柳を通しての先生の面影と委細を縷々述べられ、會員の弔吟披露、殊に川柳塔社西尾副主幹が切々故人に語りかけての御ことは往時の徳ばれて満場寂として声なく、こみあげてくる涙を抑えました。

先生と川雉、川柳塔、ささやまに就いて今私が拙い筆、限られた紙面で何をか語る事が出来ましよう。私がささやまに入会し先生との出会いは二十数年前で、恰もささやま支部が先生の秀句により川雉の優勝楯を受けられその楯を飾つての意義深い句会でした。

#### 本店の平へ課長の如才なし

無鬼

その後、支部先輩ひか平氏の入賞句に依り楯は再びささやまへ。三回入賞支部なく楯は永久保持となりました。定めし先生の功績と共に、とわに輝くことでしょう。

最近柏原文化会館、デカンシヨ老人学園等、川柳部門講師として尽力され、會員も増加の一途を辿り一昨年はささやまは三百号を記録するまでとなり、兵庫県よりともしび賞をも受けられ支部一同栄誉を領て頂きました。更に五百も千号迄もこの灯をともし続けることを御霊前に誓つて拙文を擱きます。

無鬼先生、さよつなら。

合掌

蓮の苑もとより鬼のないところ　　みのる

## 嗚呼 大樹小西無鬼氏

### 板尾 岳人

「おい岳人、こんな田舎迄来てもらつてなんにも土産はないけれど、これ土産や」と云つて戴いた短冊が

#### 神様を鈴で起して頼んどき

無鬼

五十年に及ぶ一途な柳歴。剛直から次第に柔和と自在へ。人柄を反映する代表的な句であります。対象を真正面に据えて、少しも緩みがなく、また言葉のあや、技巧のけんを捨て、深まる老いともいよいよ孤心の澄みに句情は深いものがある。

私は大樹が好きである。とりわけ樺大樹が好きである。四方八方に大きく枝を広げて空を被うように茂る樹、うつくしく芽立ち、やがてみどり濃き樹陰をつくつて人々、山ではわれわれを憩わしてくれる。風雨をもさへえぎってくれる。枯木になったとき形よく傘をひろげたような姿が又風情があつて魅せられる。小西無鬼氏を樹にたとえれば、この樺大樹

がふさわしい。氏はその風貌も樺大樹のように見事で堂々たる紳士である。

葬儀に参列させて頂き、本社副主幹・西尾栗先生の弔辞の言葉を捧げられている最中、一般参列者の中からすすり泣きの声があちこちから洩れ、私も胸が熱くなる思いだった。やはりこれは小西無鬼氏の人柄を証提づけるものであろう。誠実で自らにはきびしく、人のためには一肌も二肌も脱ぐ男氣のある、意志と努力の人であり、柳人としての資格を備え天分もあり、不屈の魂をもつて句作しつづけてこれ、老いてさらに艶を増し入神の技をみがき出されたのである。

無鬼氏との出会いを想い出す時、わたしは深い悲しみをおさえて感慨ぶかくなり、胸が熱くなる。誰れにも親切で温かい態度で接してこられた無鬼氏、大樹にふさわしく、いつ迄も太陽があれば影を、雨が降れば傘をお与え下さい。

山の峰　一樹大樹よ　葬へゆく　　岳人

#### 同人名簿訂正

8P　竹中綾珠の住所は

東大阪市下小阪3-16-11

9P　中村比呂志は中原比呂志の誤り。

情 熱

山内静水選

仕事への情熱婚期がとうにすぎ  
 カラオケを歌う情熱だけの人  
 情熱が仕事の鬼にしてしま  
 情熱を小出しにドンファン灯に泳ぎ  
 少年の情熱マンガ積み重ね  
 情熱をかきやすに歳をとるぐりあい  
 情熱を燃やすに歳をとるぐりあい  
 情熱に水ぶっ掛ける金遣い  
 情熱の果ての拳固だ咎めまい  
 七転八起情熱押し通す  
 ワキ役に徹し切ってる太郎冠者  
 判官へただ一筋に静は舞う  
 情熱が妖しく燃えてる玉三郎  
 情熱の過熱ピンタが飛んで来る  
 ふれあいに昂ぶる老いの情熱よ  
 情熱が消えると背丈まで縮み  
 情熱は誰れにも負けぬ車椅子  
 現役を去る日情熱枯れていた  
 段畑へいどむ情熱過疎守る  
 情熱と情熱シヨートした火花  
 情熱は誰ればばからぬ持論持つ  
 情熱がさめればネジも馬鹿になり

美穂 鮫虎狼 喜醉 喜一 里風 檜三 秀峰 大柏 掬治 春日 本蔭棒 はじめ 枯梢 素身郎 洋々 悠泉 一路 方大

女傑ふとわが情熱が怖くなる  
 狂人になる情熱を危ぶまれ  
 情熱の詩人の拾う椰子の実一つ  
 情熱を抱く幸せな道ひとつ  
 一徹の父情熱の化身かも  
 白百合という情熱を笑う花  
 情熱をこんな形に問う塑像  
 情熱の火花に狂う経机  
 情熱のスランプ黙って旅に出る  
 情熱を温め凡人域を出ず  
 情熱をちやらんばらんが煙たがり  
 刀水 本蔭棒 多賀子 重人 カズエ 宵明 浪速子 古都路 木魚 洛醉 凡太郎

ロ ー ン

藤井一二三選

五月晴れローンの家も鯉のぼり  
 ローン終えやと陽の射すマイホーム  
 背伸びした暮らしへローンが増え続け  
 じわじわとローンが老後の夢を食い  
 家屋敷手離す破目のローン借る  
 中流の面目ローンで整える  
 嫁した娘のローンが余生について来る  
 ローンない夫婦の会話にかけがない  
 ローン済みクラー涼しい風になり

和子 胡頹子 素身郎 洋々 代仕男 どんたく 日枝子 女

情熱に耐えて十年目の開花  
 落日にさらす男の情熱だ  
 鬼になる師の情熱が判りかけ  
 一病息災情熱まだまだ捨てはせぬ  
 情熱の燃え尽きること若死にす  
 情熱の顔仁王からもう  
 情熱を剥き出しにして獣道  
 ややもする情熱恩師のみ声する  
 茶人 与根一 晚明 秀峰 凡太郎 本蔭棒 優 方大 義美 裕 悠泉 克枝 哲寿 富子 宵明

見栄捨てた暮しにローンなどいらぬ  
 流行のさき取りローンで旅に出る  
 労働の汗はローンが持つてゆき  
 子の学資家のローンと父覆せる  
 氏神のつもりのローンにのめり込み  
 中流の意識ローンの中に住み  
 結局はローンが無理となった遺書  
 二十年のローンで家もくたびれる  
 ローンの判押しして残業欠かせない  
 始まったローンに墓場まで追われ  
 共稼ぎローンでうさぎ小屋を建て  
 借家から出世ローンで家が建ち  
 長生きさせてもらったローン済む  
 口惜しくもローンが辞書かせない  
 嫁った娘のローンは母の手内職  
 毎朝を妻とローンに背を押され

ローンで建てた家とは言わず内祝  
ローンすむまでとバイトの妻と出る  
ローンまだ済まぬピアノへ子が飽きる  
花子

佳

部屋飾る名画ローンを忘れさせ  
またローンですかと家計簿がぼやく  
中流の仮面ローンが離れない  
里帰りローンをすこし泣いている  
ローン追う女虚栄のふちに居る  
洛酔

みどり

凡太郎

幸一

重人

洛酔

八人目の敵はローンの貌でくる  
芳子

地

ローンなど係わりはなし傭を打つ  
軒太楼

天

保護色が好きでローンを嫌い抜く  
克枝

軸

古いへまだローンぬかるむ日がつづく

孫

石垣花子選

すぐ財布ゆるめたくなる孫の顔  
孫の顔見れば年金踊り出る  
孫の寝顔ババ似ママ似と里でもめ  
生きて行く支え二人の孫育つ  
四分六に負ける将棋を孫とさす  
枯梢

重人

芳水

和子

早苗

枯梢

北風をかばって孫へ好々爺  
おじいちゃん寝付いた孫をもつ起し  
一〇〇点がありそう孫のランドセル  
また一人孫がふえませすみどり風  
大ママと孫に呼ばせているルージュ  
貰うもの貰えば膝から孫は逃げ  
血の通う孫です俺に似て勝気  
孫抱いた大臣たのおじいちゃん  
夢の中まだ見ぬ孫が笑いかけ  
悪口を云う日の孫は嫁に似る  
ばらつきがあつて孫達おもしろい  
孫百句まだ言いたりぬおばあちゃん  
孫曾孫増えて余生に張りが出来  
許されぬ恋へ和解の孫産れ  
初孫がそれあくびしたくしゃみした  
年金の周囲を孫に取り巻かれ  
子から孫へ古いの夢灯をともし  
孫が来て笑い転げる家族の輪  
嬉しい日笑顔の渦の中の孫  
孫自慢出来の悪いのは言わず  
茶の間のボス孫がチャンネル支配する  
春うらら老母と孫と犬がおり  
孫が去にもとの夫婦でまた黙り  
抱きぐせをつけて三割下げて居る  
外孫の躰を叱る里の母  
外孫へ朝な夕なにカメラ向け  
俺に似ぬ子に俺に似た孫が出来  
孫抱いた温くもり庭の円い月  
大物になるかも知れぬ孫を抱き

洛酔

与呂志

里風

富子

どんたく

夢酔

軒太楼

利義

寿幸

武水

柳子

三和

胡頹子

優

テルミ

弘朗

明朗

文平

女

竹馬

勝一

はじめ

茶人

与根一

代仕男

忠夫

久仁於

植三

胸に鈴ならず孫あり余生満つ  
俺の短所が孫に遺伝をしようとは  
ばあちゃん子春夏秋冬風邪を引き  
孫が居て対話の種を蒔いて呉れ  
ばあちゃんとおままと止めた一年生  
孫を抱くこんな幸呉れました  
人生のたそがれ子に折れ孫に折れ  
肩車孫の高さに枇杷が熟れ  
相好を崩して孫に踊らされ  
孫からの安心貰う電話口  
わけ有りの孫が末子となる戸籍  
母ちゃんが居ると孫も気を使い

佳

宵明

大柏

克枝

洋々



禁煙は三日のうちに消えている  
 (三日目に禁煙宣言ガタが来る)  
 通夜の席煙草の灰がたまつてる  
 (香煙と煙草でけむる通夜の席)  
 親方の煙草 枝振り決めている  
 難題が続き灰皿とりかえる  
 (難題山積 灰皿も山積)  
 二本目の煙草へ決心まだつかず  
 煙草の輪はかなく消える夢ばかり  
 (煙草の輪はかなく消える夢馬灯)  
 合格を祈りこっそり煙草止め  
 やれば出来る今朝で禁煙九二年  
 (禁煙二年僕にもあったこんな意地)  
 残業が続くと煙草代かさみ  
 リーチひと声ゆっくり煙草出す  
 (リーチひと声ゆうゆう一服喫いつける)  
 ふかしつつ物思ふ夜更けやらす  
 (煙草から煙草へ継ぐ物思い)  
 輪を描く煙草に疲れ吐き出す煙草の輪  
 (やれやれと疲れ吐き出す煙草の輪)  
 物思い煙草の灰がポトリ落ち  
 こっそりと昏にかくれて吸うた過去  
 (こっそりと喫うた十九の春憶う)  
 煙草の火にっこり借りる汽車の窓  
 煙草の煙輪にして空想延びにのび  
 (煙草の煙輪一つ詰め二つ詰め)  
 手のひらを灰皿に託して祖父達者  
 煙草銭などと云えない煙草銭  
 (煙草銭家計簿の顔しかめさせ)  
 吞んで喫う悪い煙草がたまらない  
 (アルコールでニコチン溶かして胃に送り)

美智子

同

英子

同

佐代子

同

昭治

同

健司

同

房子

同

貞子

同

千子

同

自販機の煙草少年を誘惑す

(自販機の煙草が少年よ喫えと云う)

煙草の輪消えないうちに愛を告げ

少年A煙草が一步をあやまらせ

(少年の一步狂わす紫煙の輪)

スト中止みんな煙草を捨てて立ち

腑に落ちぬ話を思い出す煙草

(腑に落ちぬ点を煙草に聞いてみる)

言訳けを黙って聞いてる煙草の輪

煙草吸う手つきも慣れた赤い爪

(細巻きを喫う赤い爪妖し過ぎ)

大上段に嫌煙権など云わずとも

料亭の畳に点々煙草焦げ

老いの一徹いまだに刻みを喫い続け

(老いの一徹いまだに煙管はなさない)

病室のかくれ煙草に連れがてき

同

日枝子

同

凡太郎

同

昭代

同

瓢太

同

忠広

同

武水

同

保夫

同

露杖

寝煙草のミス大げさに叱る妻

まだ死ねんだつたら煙草止めなさい

老人がけむがる若い娘の煙草

五十年の煙草と縁を切らされる

罪を抱く胸に煙草の火が走る

火の言葉抱いて紫煙の輪をくぐる

胸の内吐いて一服喫いつける

(松原寿子)

同

同

同

同

同

同

同

同

題一替玉—8月20日締切(10月号発表)  
 宛先 岡山県倉敷市下津井一—九—三四  
 本 田 恵 二 朗  
 二七—

大 萬 川 柳

「まん中」

入選発表

選者 川村好郎

投句総数 三百九十二句

入選 四十六句

大阪 ひろ子  
反省も希望も四十路のまん中で

大阪 ふみ

まん中に生れてひがみ多い日日

尼崎 千子

生活程度中位とふんであわてない

大阪 満津子

挫けないあらぬ噂のまん中で

旭川 大柏

九合目が半ばと山の叱咤聞く

三重 深 水

まん中で結ぼう夫婦という絆

姫路 葉香

まん中をえらんで引いて外れくじ

東大阪 綾珠

なかいとと呼ばれ船場の乳母うち

貝塚 千代

まん中の娘が一番先に嫁き

大阪 刀水

親と子のまん中埋める土がない

鳥取 洋々

中立の旗はどちらにでもなびき

富田林 花梢

食卓のまん中にある消化剤

人生のまん中へんで迷い出し

まん中を歩く男で出世せず

十字路のまん中へんで裁かれる

大阪 弘生

わが国をまん中に書く世界地図  
まん中は右と左の顔をもつ  
倉敷 里風

シヤッターのまん中恩師丸う老け  
青春のまん中君が居て僕がいる  
大阪 勝美

川の字へ子供の寝息にある安ど  
まん中へ入った一球見逃がさず

住 句

大阪のまん中生きる屋台曳く  
米子 千代

吊橋のまん中にいるよつな恋  
松原 重人

左にも右にもまん中狙われる  
寝屋川 英千子

真ん中の恩師時折り涙拭く  
交野 テルミ

出勤の靴まん中に揃えられ  
人ノ句

目立たずに塔を支える芯柱  
和歌山 武雄

地ノ句  
高知 三吉

まん中の線で妥協を考える  
天ノ句  
米子 雄々

根回しをして核心に触れてくる  
選者吟

大阪 ひろ子

大阪 ふみ

尼崎 千子

大阪 満津子

旭川 大柏

三重 深 水

姫路 葉香

東大阪 綾珠

貝塚 千代

大阪 刀水

鳥取 洋々

富田林 花梢

大阪 君子

大阪 弘生

倉敷 里風

大阪 勝美

和歌山 武雄

高知 三吉

米子 雄々

米子 雄々

選者吟

まん中を空けて嫁入道具積む

昭和五十六年度

ベストテン (六月現在)

一	一一三三	一三・五	堺	四	君子	一一・五	大阪
二	花 梢	一三・〇	富田林	五	三吉	九・〇	高知
三	寿 子	一二・〇	和歌山	六	雄々	九・〇	米子
				七	千代	八・五	米子
				八	テルミ	七・五	交野
				九	智子	七・〇	大阪
				一〇	道子	六・五	大阪

昭和五十六年度第九回

「ほどほど」 三句以内

締切 八月二十日

第十回

「出逢い」 三句以内

締切 九月二十日

以下略

投句先

〒593

堺市堀上緑町一―三―七

藤井二三万

大萬川柳会

川柳塔社常任理事会 (7月2日)

▼8月の常任理事会は3日(月)

〈出席者〉 栗・多久志・形水・水谷・紫香・  
潮花・太茂津・薫風・与呂志・吸江・好郎・  
萬的・柳宏子・天笑・鬼遊・瓢太・岳人・史  
好

《議事並に報告事項》

★生々庵主幹ご病気の間、本誌トピラを栗副  
主幹が執筆されることになる。

★秋の大阪市文化祭川柳大会はこのところ低  
調との批判もあり今年各柳社よりトップブ  
ラスの選者を出すことになる。本社からは栗  
薫風の両氏。

★故清水白柳氏句碑建立につき準備委員会  
から提出された趣意書を了承。

★多久志氏より六月分会計報告あり了承。

(記録・史好)

# 柳界展望

(原稿締切毎月末)

集録・香川酔々

■岩井三窓著「川柳読本・岩井三窓」が創元社より8月下旬刊行予定である。A5判・三百二十頁で、作品二千句その他川柳鑑賞、エッセイなど読物満載とある出版記念川柳大会が左記要領にて開催される。

日時・56年8月30日12時  
場所・大阪大林ビル29階会議室(天神橋南詰)地下鉄・京阪とも北浜か天満橋駅下車

お話し・寺尾俊平  
題と選者

椅子 柏原幻四郎選  
星 龜山 恭太選  
喜劇 神谷娛舎亭選  
人形 堀 豊次選  
黒 森中恵美子選  
神様 橋高 薫風選  
情け 磯野いさむ選  
顔 田中 好啓選

河童 岸本 吟一選  
特別課題(事前投句)

各題2句、事前投句は8月10日締切、はがきに2句連記。投句先〒560豊中市赤坂1-6-9石川勝宛。欠席投句拝辞。

会費・3000円、懇親宴・4000円(会場で6時より・予約制)

■第五回全日本川柳大会は6月21日金沢市において開催、三〇〇有余名の柳人が集い、大盛会であった。なお入選作品は別稿(39P)。

■津山芸術祭津山川柳大会は去る6月7日美作教育会館大ホールで盛大に開催された。本社より十余名参加中にも清水健司氏が大活躍。秀句賞を物々とした。高杉鬼遊氏も秀句賞の栄に輝いた。

■故清水白柳氏の句碑建立計画も軌道に乗り、菊沢小松園氏を委員長に準備委員会が発足した。計画案が近日中に発表される。

■昭和56年北海道川柳大会が8月2日稚内市海員会館において開催予定である。時事川柳研究会は、石原青竜刀氏亡きあとも順調に

発展、このたび時事川柳百号を発刊された。御同慶の至りである。なお同志希望の方は左記へ連絡のこと。

〒153東京都目黒区目黒3-8-1佐藤一夫宛

■よみうり時事川柳の選者が、片山雲雀氏から広瀬反省氏に交替。反省氏が5月10日から選者を担当されて

失なつた。

▼落合思月氏(東大阪市)が6月16日急逝された。氏は前本社同人で、東大阪川柳会のため、大いに努力された方である。「句集望郷」の作品集がある。

▼辻白漢子氏より、京都塔の会の吟行寄書き拝受。

▼「もえぎ会展」(日本画展)が7月7日(火)から12日まで神戸三ノ宮センタープラザ2F京美画画廊で開かれ、山口美穂さん(神戸市)が出品された。

▼川柳高知の秀句評を橋高薫風氏が多年執筆されていたが、今回高杉鬼遊氏と交替された。

▽同人・柳人消息△

▼両川洋々氏(鳥取市)胃潰瘍のため入院加療中のごろすつかり快癒されて、職場復帰をされたとの由。何よりのことです。

▼中島生々庵主幹は、目下自宅療養中。経過順調である。一日も早い御快癒のほど祈ります。

▼菊沢小松園氏、七時間の大手術に耐え、手術成功。快方に向いつつあり、嬉しいことである。

▼福永清造氏(京かがみ主宰)は、5月23日他界された。享年73歳。関西川柳界は、また一人偉大な作家を

失なつた。

▼落合思月氏(東大阪市)が6月16日急逝された。氏は前本社同人で、東大阪川柳会のため、大いに努力された方である。「句集望郷」の作品集がある。

▼辻白漢子氏より、京都塔の会の吟行寄書き拝受。

▼「もえぎ会展」(日本画展)が7月7日(火)から12日まで神戸三ノ宮センタープラザ2F京美画画廊で開かれ、山口美穂さん(神戸市)が出品された。

■南海電鉄川柳部  
時・8月20日(木)夕6時  
場所・南海電鉄本社地下食堂

兼題||車掌、甘党、粗大ごみ。

連絡先||〒590堺市榎元町2の1の23辻圭水

■東大阪川柳会  
時・8月22日(土)夕6時  
場所・東大阪市中央公民館近鉄永和駅前

兼題||裏づけ、スポーツ紙、脱線、銅像。

連絡先||〒577東大阪市新池島町1の4の14斎藤三十四

■菜の花句会  
時・8月10日(月)夕6時  
場所・西郷会館(八尾神社境内)近鉄大阪線八尾下車

西南歩3分幸福相互銀行裏兼題||村長(西尾菜)、運(香川酔々)、大阪風景、終点、越える。

連絡先||〒581八尾市中田2丁目302高杉鬼遊

■南大阪川柳会  
時・8月20日(木)夕6時  
場所・阿倍野区松崎町大萬

兼題||ヤング、破る、やき鳥、休み、八つ当り。

連絡先||〒544生野区生野西1の5の2金井文秋

■堺川柳会  
時・8月15日(土)夕6時  
場所・堺市民会館4F和室

兼題||銀河、半分、一と切れ、輪。

連絡先||〒593堺市堀上緑町2丁9の2河内天笑

■駒つなぎ川柳会  
時・8月24日(月)夕6時  
場所・天王寺区寺田町高松

兼題||酒量、広場、おしほり、八月。

連絡先||阿倍野区天王寺町北1の3の11津守柳伸

# 川 柳 た け は ら

〒725 広島県竹原市竹原町田中

山 内 静 水 方

久しぶりに  
大 会を  
します  
皆さまの  
お越しを  
お待ち  
しています

高橋 鬼焼 時 一 路 森 井 菁 居 三 宅 不 朽 古 谷 節 夫 古 田 鈍 舟 古 田 比呂子 岩 本 文 晴 岩 本 笑 子 八 木 秀 水 小 島 蘭 幸 山 内 房 子 山 内 静 水 ほか一同

暑中お見舞

空青し山青し海青し人恋し

川柳わかやま吟社

# 本社 七月句会

会場 金属会館

七日 午後六時

路郎忌句会。今日は麻生路郎先生の十七回忌である。冷房もきかぬ程の八十余名のご出席で会場はむしむしする。司会の柳宏子さんが、中島生々庵主幹・菊沢小松園氏の病状の経過良好を報告、出席者一同安心する。路郎先生への黙禱に続き、川村好郎氏のおはなしは、路郎先生の思い出である。昭和十六、七年頃、大阪新聞に大阪柳壇あり、岸本水府・麻生路郎両先生が選者でおられたのへ投句したのが最初、その後、松坂俱樂部で路郎先生の個人指導を受けた。初めて選者として選をした時、初めて柳話をしたときも、それぞれ適切厳格な感想と教示を受け、今に至るまで選句やはなしの前には、先生のお言葉を思い出して糧としていると、師恩の永遠を述べられた。番傘から磯野いさむ氏をはじめ多数のまた、天守閣から久保田以兆氏、ひなどりから狹田川狂子氏のご出席を得たことを心からお礼申します。

月間賞はベテラン岩本雀踊子氏が獲得。K

(受付)与呂志・敏・(重人)  
(進行)柳宏子、記録(重人)

出席 | 与呂志・敏・重人・芳川・英王子・  
鬼遊・勝美・水客・潮花・雅風・千万里・蘭  
・千代三・瓢太・智子・眉水・葉平・太茂津  
・きみ・登志代・武雄・千寿子・桐下・悦郎  
・規不風・ひろ子・紫香・喜一郎・雀踊子・  
君子・右近・アキラ・好子・山久・川狂子・  
満津子・道子・洋子・英子・栗・三十四・度  
・洋敏・たつお・千梢・武太・射月芳・以兆  
・好郎・一二三・春巳・月子・健司・岳人・  
久子・喜代志・三窓・文秋・萬的・多久志・  
喜風・勝晴・形水・憲祐・幸生・普紫・植三  
・柳宏子・薫風・涼一・天笑・寿子・寿美子  
・万彩郎・いさむ・夕花・酔々・花村・元紀  
・頂留子・柳伸・鎮彦・葉子。

## 席題「叱る」

西村芳川選

六月の猫は何度も叱られる  
叱られて叱られ通してママが好き  
叱るときの母がとつても温かい  
宮仕え叱られ上手も芸のうち  
将来叱る親爺の瞳が濡れる  
叱られた先生だから好きになり  
夜遊びを叱ると猫が家出する  
見どころがあつて親方よく叱る  
親として己れを叱り子を叱る  
終電車叱つた悔がまだ残り  
叱られる度に子の知恵ついてくる  
無理してはいかんとつて叱られる  
叱られてトイレの中で考える

智子 千代三 君子 憲祐 一二三 元紀 たつお 憲祐 形水 柳伸 涼一 智子 涼一

子に叱る事あり父も正座する  
叱る日の父は盃口にせず  
叱られてきたのか課長のハツ当り  
子を叱る隣りの真似はやめとこ  
物干で叱ると近所へ皆聞こえ  
亡き父の想い出叱られたことばかり  
叱る父ほしいと死んで後でいう  
真夜中の墓へ一人で叱られた  
叱るときまず仏壇に灯をいれる  
孫の嫁に気兼ねの核家族  
お隣りを引きあいに出し子を叱り  
隆元が叱る政治の裏の裏  
千鳥足九官鳥に叱られる  
終電に叱りすぎたか降りてこず  
叱つては見たが教師も恐くなり  
叱るチャンス逃がして梅雨はまだ続く  
叱られる子感教室静かなり  
遮断機が降りる叱られないうちに  
他人の子叱れず我が子叱つとく  
叱るとき母は悲しい目を向ける  
叱られた事が話題のクラス会  
阪神が勝つて今夜は叱られず  
交番で叱る巡査が汗をふく  
先生が覚悟をきめた叱りよう  
叱つても叱つても野良犬ついてくる  
母さんが叱られても電話口  
叱られたことが自慢になる集い  
叱られて急に親父が近くなり  
年上の女が叱るハネムーン  
口べたが叱ると荒れてくる対話

千万里 潮花 好郎 桐下 右近 多久志 憲祐 喜代志 三窓 喜風 一二三 たつお 岳人 涼一 以兆 太茂津 天笑 醉々 喜一郎 雀踊子 登志代 月子 紫香 重人 道子 月子 洋敏 射月芳 鬼遊 芳川

席題「汗」

久保田 以兆 選

楽園へ一歩手前の汗である  
汗知らぬ金は悪事を考える  
快い汗が背中にわいてくる  
よき知らせしてくれたと汗をいたわられ  
週末の汗を流せばクリスタル  
汗入れる麦茶はポットままでのみ  
かぐわしい汗が立つと舞扇  
汗流す喜びあって立直り  
惜しみなく農夫の汗は土に散る  
人のため流す汗なら美しい  
汗の味知ってる金は無駄を知る  
冷汗をかいたは内緒にしたまんま  
汗の手で妻の弁当あげる昼  
横綱の汗もかかない勝名のり  
冷や汗を見せてはならぬ芸の中  
一しゆんの出来事冷や汗かいている  
急停車冷汗かいただけですみ  
お小言がようやく済んで汗を拭く  
奉仕する尊い汗は光ってる  
川下り船頭だけが玉の汗  
親父の汗今日の汗ビールのうまい夕  
一年の汗に今日ある優勝旗  
セールの汗へバタンと戸がしまり  
大の字の昼寝は汗を気にしない  
生真面目に生きる履屋は汗臭い  
ひや汗がお化け屋敷で手を握り  
塩辛い汗を浜辺に落とす海女  
下積みみの汗の辛さを無駄にせぬ  
手術台メスとる医師にじむ汗

千寿子 射月芳 文秋 元紀 英王子 千代三 右近 翠光 千万里 翠光 柳宏子 桐下 重人 柳伸 川狂子 三十四 智子 蘭 いさむ 多久志 憲祐 寿美子 度 武雄 岳人 千代三 桐下 多久志

なめてみると自分の汗も塩辛い  
石段できたえる汗の青春譜  
マウンドの汗に満足感がある  
風邪薬汗を嬉しくかいている  
汗びつしりそれでも踊りの輪につづく  
汗かきのたちでのおだてに乗る女  
いいわけが辻褄合わぬ汗をかき  
しみじみと汗の尊さ知る日銭  
子育てに涙は見せぬ母の汗  
絞ったらしたる汗の心地よさ  
タレントの額の汗に拍手沸く

兼題「眠る」

高杉鬼遊選

眠ったら負けだと思ふ定年制  
平凡な妻でよく食べよく眠る  
婚礼の前夜父だけ眠れない  
可愛らしい娘だから居眠る肩を貸し  
冬眠が出来ても母はしない苦  
切り札があるので眠る真似をする  
会議室社長の檄に眠くなり  
おばあさんの方がもう眠い童話  
眠る間も惜しい女の手内職  
兵の墓母より先に眠るのか  
付添いも眠り折鶴だけ動く  
眠り人形寝ついた頃に起こされる  
居眠っている間に阪神負けている  
飼い犬の寝たまま尻尾振って見せ  
不発弾抱いて疲れたまま眠り  
花束を胸に少女は眠れない  
蝶眠るお花唄の夢を見て  
老夫婦いつか寝言で返事する

勝晴 千万里 紫香 千寿子 登志代 萬的 文秋 喜風 洋敏 万彩郎 以兆 三窓 道香 紫雀 右近 悦郎 重人 英王子 蘭 岳人 紫香 花村 寿美子 憲祐 好郎 満津子 紫香 一三三

第五回 茗人忌川柳大会

とき 56年8月30日(日) 午前10時

ところ 鳥取市富安、鳥取工業福祉会館

「鴻南閣」(鳥取駅南口五分)

お話し

兼題

「日本海」 野村太茂津氏  
「空気」 西尾 栗選  
「いたずら」 岩本雀踊子選  
「ポイント」 板尾 岳人選  
「ふさぐ」 河村 日満選  
小林由多香選

席題 当日二題

会費 二千八百円(懇親宴・作品集含む)

投句料 八百円

投句のみの方は8月10日までに着くよう  
鳥取市相生町三丁目二〇四 森田熊生宛  
お送り下さい。

うみなり川柳会

乳母車にうちの皇太子が眠る  
名曲鑑賞拍手の音に眼をさまし  
花火見た夜は満足して眠る  
雑兵にふかく眠れぬ首がある  
神将の眠りを包む深い闇  
涼 一郎  
好 郎  
酔 々  
喜代志  
たつお

環状線昼は静かに眠らせる  
先生も生徒も眠り定時制  
お地藏さん拜んだあとで眠くなる  
金持ちの銭の話に眠くなる  
休耕田眠って居れば金になる  
妻と子が眠ってからの風の音  
眠り姫軍靴の音に目を覚ます  
写経して鬼一匹を眠らせる  
喪服たたむととても眠たくなってくる  
一九八一年眠る兵士よ信じるか  
不渡り手形ガヤガヤ動物園眠る  
正式にふとんを敷くと眠れない  
保育器の中でよく眠る足の裏  
勲章をもらわぬ兵の眠る墓  
火宅無情ひたすら男眠りたし  
母を眠らせ父を眠らす石ひとつ

兼題「惚れる」

児島与呂志選

黙々と励む姿にひと目惚れ  
幕場まで惚れ抜いたまま添えぬまま  
本当に惚れた女をもてあまし  
真面目さの滲む楷書に親が惚れ  
あと味のながさ惚れたる嘘をつく  
ホステスに本気に惚れた使い込み  
裁かれて惚れているのを確かめる  
二次会の仲居に惚れる酔い心地  
惚れている弱さを持っている視線  
男も惚れるそんな男を信じたい  
惚れ込んだ仕事勲章などいらぬ  
酌み交す男に男が惚れた酒  
うぬ惚れはないが自信は持っていた

好子 千代三 眉水 太茂津 潮花 道子 夕花 智子 幸生 アキラ 度 芳川 雀踊子 水客 鬼遊 哲夫 どんたく 刀水 形水 萬的 千万子 千梢 酔々 雀踊子 夕花 英子 滋雀 好子

惚れたのは娘についている遺産  
歳月は惚れた同士を狂わせる  
惚れるものないからパチンコでもしよう  
馬鹿な女やなどと女房に惚れている  
惚れるのが一足おくれから悲劇  
惚つばい男で妻の目が光る  
惚れた振り見せぬ男にある未練  
惚れている女将の誕生日を覚え  
惚れている電話とわかる甘い声  
惚れられているから涙ためておく  
生き生きと仕事に惚れた男の目  
人柄に惚れ清貧に甘んじる  
惚れた弱身で肩のこる養子です  
惚れている証換段々無口になっている  
男気の働く姿に二度惚れる  
片思い惚れたともよう言えず  
口先きで惚れると命がけて来る  
惚れている耳はなんにも聞えない  
惚れている女は指定の場所に居る  
炎上する程ではないが惚れている  
白鳥が自分に惚れる水鏡  
お互いにべールを付けて惚れている  
惚れているからこそ手をかか品をかえ  
惚れ込んだ親が娘へ押しつける  
惚れこんだ分だけ女泣かされる  
幕場まで惚れた弱みがついてくる  
仕事着の夫にいちばん惚れている  
惚れている方が喋らぬテイルム

軒太楼 柳伸 健司 洋子 寿美子 アキラ 鬼遊 川狂子 醉々 規不風 アキラ 右近 弘生 桐下 ひろ子 三十四 悦郎 悦郎 度 悦郎 英子 道子 翠子 翠光 潮花 登志代 憲 祐 満津子 与呂志

兼題「石」

磯野いさむ選

故落合思月氏の  
ご遺族から  
金 一封  
拝受致しました  
川柳塔社

石で釘打って女が強くなる  
 螳螂の斧かも知れぬ石を投げ  
 加工場の石はおしゃれな夢を見る  
 バレレンのうらみがつのる石畳  
 夕焼けて子供が散って石ひとつ  
 捨て石になる片道の切符持つ  
 百度石悲痛な願い聞いている  
 ハイチーズ句碑になる石背景に  
 苔のない石で碑志のわかぬ鮎  
 鼻唄まじりで墓石を彫っている  
 奈良暮色史跡に残す石の刑  
 城の石運んだ人の汗思う  
 星になる夢をすてない山の石  
 殺したい男がくれた猫目石  
 いつも受身で投げる石あたためる  
 月の石うさぎが化けているのかも  
 石をもて追われし啄木の死よ  
 研磨機をくぐった石にある自信  
 庭石の一つ一つがもつ主張  
 石の遺産シルクロードに陽が沈む  
 石置いて孫が金魚の墓にする  
 その石に行きと帰りにけつまずき  
 残念石瀬戸の浪路をおおらかに  
 漬物石耐える女になつてゆく  
 愛の石つむ崩れるもくすれても  
 四面楚歌石になりきる肚を決め  
 風化した石逆臣の名を残す  
 コレクション石には石の顔がある  
 つながりがあるのかインカ飛鳥石  
 石畳からゆきさんの下駄が泣く  
 石組みの立つて座ってワビと云う

刀水 形水 君子 涼一 春巳 滋雀 文秋 三窓 喜代志 雀踊子 鬼遊 潮花 水客 敏 葉平 英子 柳宏子 萬的 憲祐 喜代志 眉水 寿子 千代三 たつお 勝美 一三三 水客

沈黙の重さが庭の石にある  
 石を積み暮の河原の子がいとし  
 ポケットへ旅情しのはす浜の石  
 翔んでる女石の鳥居の上の石  
 石庭に座れば山と海の音  
 大波にもたたかかってきた丸い石  
 刻まれて石は仏になりすます  
 石庭の石泰然と悟り持つ  
 年輪の石がころころ円くなる  
 石ばとけ苔が生えても童顔で  
 かぐや姫に見せたい月の石がある  
 投身の袂に入れる石もある  
 深追いは止そ捨て石が待っている  
 勝った日の白い碁石の肌ざわり  
 石に彫る歌が教訓調になる

兼題「正義」

西尾

翠光 喜風 喜み 花村 洋子 好郎 射月芳 文秋 悦郎 登志代 洋子 千代三 憲祐 潮花 いさむ 葉選 寿美子 度 柳伸 鎮彦 規不風 たつお 水客 英子 武雄 智子 滋雀 右近 鬼遊 千梢

父と子に熱い正義の血が流れ  
 マント着た正義の味方が欲しくなる  
 窓際に正義の朽ちる椅子がある  
 正義感ラッシュの時は忘れよう  
 正義のしるし庭旗にもつかがわれ  
 スーパーマンの正義をいつまで憧れる  
 金さんは正義つらぬく肌を見せ  
 正義派で通り煙むたい人にされ  
 仁王さんの眉は正義を崩さない  
 正義感邪魔をしている宮仕え  
 正義感裏も表もない香車  
 正義の人ばかりでドラマ成立たす  
 正義面とかく美人の肩をもち  
 口にする正義若いなと言われ  
 ポケットで正義のこぶし耐えている  
 仙人掌の棘の如くに正義感  
 先代の遺影に残る正義感  
 桜吹雪に溜飲下げる正義感  
 ほとばしる正義は今も鶴形  
 すこしだけハメをはずした正義感  
 正義感おつちよこちよいと云われそう  
 金になる話で正義引つこめる  
 四面楚歌正義は明日を信じとり  
 正義とは妻子を騙すこともある  
 黒帯で拓大にいる正義感  
 そろばんに合わぬと知っている正義  
 正義抱く男に孤高の影がある  
 ああ正義辞表一枚かかされる  
 正義のドラマなら見る母であり

鎮彦 洋子 武雄 多志 川狂子 君子 千代三 好郎 智子 勝美 重人 静馬 幸一 頂留子 敏 醉々 夕花 芳川 形水 きみ 月子 太茂津 軒太楼 雀踊子 千代三 喜代志 君子 雀踊子 葉



■原稿用紙を使用。締切毎月末着便まで。十七字以内の句に、下二マスに雅号。

(整理・香川酔々)

南大阪川柳会

中川 滋雀報

ごますりのライターかちりかちり鳴る 酔々  
魂を売って豪華な家に住み 健司  
はずかしい誤解流れる雲を見る 一二三  
ゴキブリが走ると五戒もあらばこそ 度  
遠雷へ出足の鈍る帯をしめ  
合格のしるし彼女の父の酌  
空想が拡がり豪華な彩になる  
誤解するほど夫には金がない  
五月雨にさし木命を授けられ  
五円位と思う値上げが憎らしい  
ごますりが今夜も課長ととまり椅子  
豪華さにトゲ気付けぬバラの性  
ごますりに困まれ自分を見失ない  
夕立も誤解も避けぬ最合傘  
チエのない誤解で顔を逆なでる  
ごますりが注ぐと濁ってくるお酒  
すばらしい誤解は虹が消えるまで  
見てくれは豪華では火の車  
合格点もらえぬ夫婦で仲がいい

柳宏子 楓楽 滋雀 智子 文秋 蘭 綾珠 柳伸 千梢 頂留子 千万子 千代三 君子 久子 洋子

一枚のラベルに合格保証され  
勝山双葉川柳会 河野 君子報 勝美

原爆の時計は歴史を止めたまま  
狡みせぬクオーツに気が疲れ  
定退の時計機であくびする  
横顔にこんな寂しい母がいる  
横やりが入って計画くずれそ  
横道にそれで人生の裏も知り  
雑草の新芽見つけた庭帯  
下駄の音のれんを出てくる通り庭  
庭一つ隔てたところに置く余生  
お灯明消して様ぎに出る夫婦  
同郷の夫婦で消えぬ国訛り  
残留孤児消えた戸籍に火がともる  
バーゲンで買ったネクタイ他人もしめ  
齢若く告げてネクタイ撰ぶ妻  
ネクタイを外され余生ちぢこまる  
ネクタイを外すと仮面まで外れ  
ネクタイを締めると妻子が遠くなる  
場所がらへ今日はネクタイ締めてゆく  
駒つなぎ川柳会 里 小路報 柳伸

カラオケに乗る日の父を瞞せない  
参加する妻が話題の本を読む  
君が代を唱う素朴さ持つている  
鳥を出る素朴な長持唄と出る  
大物を母は素朴な手で育て  
ワンテンポおくれる素朴憎めない  
おだやかな線東山春となる  
おだやかに話そう別れの夜だから  
おだやかな暮らしへ舞い込む姉妹  
洋子 頂留子 節子 藤子 智慧子 千里 静子 秋子 智子 芙佐女 楓楽 良子 妙子の いくの 喜代美 千万子 君子 久子 小路報 柳伸 信治 白兔 醉々 桐下 射月芳 恒明 萬的 潔 茂子

倒産の前夜は無気味なおだやかさ  
おだやかな顔にもどった仲直り  
おだやかな寝顔頑固さうそみたい  
野仏のお鼻へ蝶が来て止まり  
おだやかな顔は仮面かも知れぬ  
おだやかな日々が続いている不安  
おだやかな寝息をたてる未亡人  
おだやかな仏の顔に皺がない  
おだやかな顔で実印のことわられ  
おだやかな妻の寝顔に裏切れぬ  
川柳高知 川竹 松風報 菊野 廣風 節 富久子 弘生 登舟 麗子 竹萌 松風 西村 早苗報 独仙 鉄花人 登美也 きみえ 孝華 裕

連休のプラン苦になる子沢山

母の目のとどく広さで子は遊び

これからが養子の親に成る試練

一直線に男が生きる風当り

美しい夕焼け湖が恋をする

事実には勝てず重たい口ひらく

籠の鳥鳴いて五月の家は留守

たみなる話術へ女少し酔い

塗箸でうどんがつるりとして行き

郵便局と医者に近いのでよい住居

想うことはかり女に春遠く

春宵の愚痴は云うまい月囃ろ

川柳ささやま

急所には触れずにおこう明日がある

和を守る急所は姑の胸の内

大峰の急所へ男に行き

ぐうの音も出せぬ急所にメスさされ

泣きごとと言わぬ夫の肩の中

日曜の空へ肩書置いて来る

風を切る肩が初心を忘れてる

行く道は神が知ってる肩を張り

近眼の細い目に会う風呂上がり

近眼が酔眼になり靴を替え

近眼で刺身高いと蔭で云い

近眼が刺身にソースかけて呉れ

歯切れよい言葉に負けてはつとかれ

指切りが出来ぬ大人の指になり

ふるさとを恋う白鳥は羽根切られ

うみなり川柳会

小林由多香報

押売りも美人の娘なら買つてやり

幸一

花子

弘朗

雄々

寿美子

メ女

緑之助

早苗

千草

亀甲

嘉寿子

多賀子

ゆう也

テル

久子

素水

貞子

百合子

宗珠

一盃

和子

越山

越山

ひか平

久子

可住

与志

芳泉

富美湖

押売りの親子生活の本を売り

退院をしても心の傷いえず

退院で再起のつるがよく伸びる

退院の酒が五臓を駆け巡る

野良犬の慣れても油断ならぬ顔

底辺の暮しに慣れた大あぐら

職辞して土にも慣れた五月の陽

五月病卒業都会の水に慣れ

風流にみどりの風を父が詠み

ユーターン迎える緑が温かい

ポラントニア参加に老後の吾が見え

どっちみち飲むと予想参加する

甲子園参加のしるしに砂がある

負けに出る参加をあわれとも思

初参加自信と不安胸で揺れ

川柳化粧槽

植村客遊子報

ポートライナー親子の夢を乗せて発ち

誕生日と知らずに孫はよく眠り

田満解決裏工作で作り出し

子を近く住ませ妻と安堵の夜

連休はすいた電車で勤める身

連休へ電話がかかった邪魔な女

ちびの靴になれては平で老い

委任状持って代理は役果たせ

満点の女に女の敵があり

青春の雲も食べなくなる裸

あの人のくせと知りつつ腹を立て

毎日が連休と云う熟年期

騒然となってロックは最高潮

適当な返事に困り油汗

とし江

銀嶺

吟月

洋々

夕路

静夫

葉士人

熊生

正

舟宏

美智子

笑王

華子

無人

由多香

紅月

秋月

岳詩

葉香

奮水

実男

越山

永鷹

大鷹

白李

拍秋

三青

遊香

多津

客遊子

わかあゆ川柳会

小砂

白汀報

生真面目な人ねらわれる四月馬鹿

失言で言いたいことを言つてのけ

食べられることを拒否して葱坊主

葱坊主嫁戻りしたい顔

うれしさを顔に言わせてかけもどり

凶に乗つてひら謝まる四月馬鹿

偶然と予感あるとき絡み合

失言と言わねば椅子が逃げそつて

斐伊川に砂金流るる四月馬鹿

葱坊主オモチャの兵隊おぼろ月

失言も冗談となる友を持ち

手さぐりで薬師の堂に辿りつき

春闘へ拳をにぎる葱坊主

失言にされて正論つぶされる

いずも川柳会

板垣

退職の日から自由な汗となり

新紙幣汗の尊さまだ知らず

菓を作る燕に春の日が長い

快心の笑みにはほのぼの陽が昇る

人柄のよさほのぼのと知る対話

久しぶり話題は戦さのことにふれ

久々の出会いにつきぬ立話

寄り添い幾年久し夫婦著

永久の平和を祈る原爆忌

久々の無沙汰を詫びて手揉みの茶

少年の集箱作りに夢が出来

雄大な富士に登つて夢を踏む

醉夢

タケノ

敏明

恒星

志保

歳栄

芳枝

輝水

鈴江

はるみ

清泉

清夢

美栄

白汀

草丘報

町紅

夢酔

早苗

みのる

榎原秀子

軒太楼

正朗

きみえ

九二老

多賀子

晴月

正江

芳子

松本文子

錦織文子

金策へ飛んで女の弱さ知る

横綱を倒した汗のインタビュー

芳信へ矢も楯もなく旅支度

芳しく生きてお金に縁がない

月蒼く花の素顔は芳しい

川柳しんぐう

産声のときから次男比べられ

田植え終え雨よ降れ降れ骨休み

手のひらに乗せた秀句にある迷い

長雨で心の傷がなお深む

突然の雨がとりもつウエディング

雨合羽のまままで昼食とる勤め

傘持たぬ子へ雨雲の憎らしさ

みどり

独仙

緑仕男

緑之助

芙佐子

大輪

雀踊子

昌子

富子

美代子

鉛筆の恥をけしこむ消し廻り

けしこむの謀叛が虹を消してゆく

良心の呵責けしこむは売ってない

暴言を消すけしこむが見つからぬ

誤字一つ済すけしこむがうまい

秀一句決まり選者の茶がうまい

自選してみんな秀句と云う笑い

自信ある秀句は女のペンネーム

ひとことの祝辞は秀句かりてよむ

よい先があれば養子と云う次男

貧農の子として次男家を出る

次男坊に負けてる兄の思いやり

鯉のぼり次男は次男の風を呑む

溪水

幸

白光子

三千代

はじむ

弘生

冬花

与呂志

武太

朝夢

すみれ

利凡

# 雅号ぶつちやげばなし

(201)

せいと



稲葉星斗

いなば

記憶に間違いなければ、私は昭和三十年十二月初めに川柳同好会が発足した日でもあった。初代は水谷鮎美先生、二代目が須崎豆秋先生、その後三代目からずっと川村好郎先生の指導を受けた。こんな立派な三人の先生に恵まれながら不肖の生徒だった私は、浅学非才に勉強不足も手伝い爾来二十有余年、愚作に終始し一向に上達しない。

雅号の星斗は単に生徒を振(もじ)って自分勝手に名付けたもので、くどくど説明を要しないが最近、城北川柳会の川口弘生先生から麦林月升なる別号を頂いた。響きも良く面白いと思うので時々投句などに使用したいと思ってる。

今後も先輩諸兄の鞭に耐え「私の趣味は川柳です」と胸を張って云える日を楽しみにコツコツと歩いて行きたいものです。

## 虹川柳倶楽部

新岡回天子報

商店街割引き特売日を替えて

たまで良い彼女とならば流したい

なまけ者催したいのに顔を借し

あれつきり葉書一枚出せぬ人

情熱が故郷を捨てて親を捨て

娘の子金科玉条瘦せること

靴下の穴を孤独が突きぬける

夫老いによる港に核を顔のしわ

狭い日本 香港に核を入れ

平均の寿命延した顔と顔

秋尊の小さい像に出る感光

停年に明日をかけて働く気

## 東大阪川柳同好会

斉藤三十四報

絵日記の父の頭に髪がある

讃岐路の一寺残った集印帖

お住持が面白いのではやる寺

由緒ある寺村中でもて余し

がらくたも遺跡から出て箔がつき

都市計画遺跡のねむりさまたげる

遺跡発掘先祖の貧しさに触れる

裸婦像の腰のあたりが盗まれる

松葉杖腰の痛さが目に見える

槽を漕いだ腰が土俵で大成し

想像の人と違った低い腰

腰くだけやばり良心あつたんや

当選をすると忘れた低い腰

腰ぎんちゃく寝床で思う部長の座

骨董屋掛軸すらすら読んでくれ

箱書きがものを云うてる軸の鯉

腰すえてやれる仕事のないあせり

勝実

素石

四郎

一竿

正敏

久仁於

義美

盛雄

掬治

虹汀

回天子

白屯

弥山人

綾珠

柳宏子

良京

美子

小松園

雀踊子

悦生

道子

凡九郎

喜風

雅風

三十四

勝美

文秋

山寺のいわれを語る絵巻物  
絵馬堂に母の願いを筆の跡

川柳塔まつえ

恒松町紅報

頂留子  
春蘭

いいところへ来客という助け舟  
太つ腹どこかビール匂いする

来客が人の家訓の脈を取る  
横糸の太さ素朴な味を織る

来客は同じ詠りて話湧き  
太い梁組んで旧家の威厳見せ

神経の太い妻でも子には負け  
現職の強味五選の祝酒

現職に名残りを惜しむ椅子を拭く  
一日の早き現職あとがない

来客の目につく位置へ表彰状  
洋裁は大きらいです太い指

脱線が運賃上げた日に起きる  
脱線で議員パッチがチトゆがみ

京都塔の会

松川

杜的報

しやぎりの音伊吹の峰はまだ白く  
出て来いと夫機嫌のよい電話

蹴とばして歩く若さのパンタロン  
賽銭の音聞いてから手を合せ

再婚をまとめた人が別れてい  
市場かごいそいそ春の音をさがす

蔭口が少し気になり日記書く  
この街の個性を変えたビル団地

コーヒーとねこの朝食いそがしく  
義理を欠き低い教居も高くなる

高うせぬ敷居に父母の艶がある  
油ぶきしたて障子がはね返り

お茶室の敷居があさいにしり口  
桂離宮敷居は見せるだけの位置

企みがあつて敷居が高くなる  
ごほうびのついでに頭なでてやり

格子戸に面影残す宿場町  
あと三丁面場が有つた道しるべ

川柳わかやま  
堀端

例えばの話が痛く突き刺さる  
生きる道擱んで過去を切り捨てる

面影を追えばやさしい風が哭く  
狼の尻尾を擱んでいる笑顔

痛いとこ突いてきそうだ酒を酌ぐ  
本当の痛さ裏押ししてから

追いつめて空しい風の声をきく  
まぼろしの自分の影を追っている

痛いけど相手の痛みもよくわかる  
擱まえた心算ばらりと逃げた運

他人様の痛み興味で目でながめ  
ジョギングの父を追い越してはならぬ

捨て台詞さされた針のまだ疼き  
ためいきと店の小銭を日か追つ

積んでいた「核」へ怒りが追いつける  
自由追う冷えた孤独とひきかえに

掴み合いの味を羨む一人っ子  
娘の家でしかと春風擱んで来

嘘つきの嘘が善人追いつめる  
幸せを掴む十指へ父母の汗

川柳高知  
川竹

お天気がよくて洗濯糊が売れ  
くすれゆく心支える花ばさみ

返答に困つたらしいタバコの火  
お天気がよくて洗濯糊が売れ

くすれゆく心支える花ばさみ  
返答に困つたらしいタバコの火

お天気がよくて洗濯糊が売れ  
くすれゆく心支える花ばさみ

くすれゆく心支える花ばさみ  
返答に困つたらしいタバコの火

返答に困つたらしいタバコの火  
お天気がよくて洗濯糊が売れ

潮花  
和友

水客  
飛鳥

三求  
白溪子

三男報  
三男

寿子  
和子

正博  
太茂津

英子  
光代

誠太  
善太

天彦  
白光子

翠雨  
紀久子

きみ  
裕美

佐代子  
千寿子

紀美女  
幸

緑楼  
松風報

竹萌  
菊野

子と酌めばふくらむ明日がある夕餉  
一輪が似合う花なり孤独必む

花好きの妻へ花買う誕生日  
下積み父が励ます初任給

舞う蝶の影におかしく狂う猫  
善人の演技も嘘もいらぬ日々

伴せの証し今日から妊婦服  
春はよし花で心が溶けてくる

鍵穴を善人覗くこと知らず  
善人の顔で鳥居を抜けている

菜の花句会  
高杉

成田山帰りは小さい事故で済み  
花の絵の鍋で魚が焦げている

恐ろしい話を秘書が聞かぬふり  
顔だけは自分に似たと自慢する

いたずらな風モンローの名を高め  
泊る気で来たのか母が持つ寝巻き

アリバイを立証するのも秘書の役  
丸刈りの顔が巡查に気に入らず

死亡欄ばかりみている秘書である  
無器用な父の哀しい顔である

らく書きが上手に出来て立たされる  
古い二人ちいさな鍋でことが足り

いたずらは乗せてやらない縄電車  
わがことのように恐縮している秘書

整形の母に似合わぬ娘が生れ  
大切に秘書が抱えてくるカルテ

赤い旗振るのになんで隠す顔  
兄嫁が女に見えて泊らない

弘生  
富久子

広風  
登舟

朱坊  
麗子

宣長  
松風

三吉  
度

鬼遊報  
度

薫風  
健司

雪枝  
射月芳

雀踊子  
頂留子

与呂志  
岳人

鎮彦  
悦郎

兔遊  
糸葉

柳宏子  
夕花

醉々  
雅風

弥生  
儀一

川柳ねやがわ

高田

博泉報

お隣りのピアノに朝を起こされる  
失言を素直にわびて友が出来

ふみ  
勝美  
柳歩

運勢は上昇気流南風  
増長の鼻折れて皺深くなる

弘生  
一菁  
満津子

親許へピアノ預けて新家庭  
失言が大きな笑いで救われる

山久  
てる子  
博泉

幕切れるあつと言うまの優勝旗  
陶酔のつばへピアノコンサート

琴音  
清香  
好子

雨降りは雨降りとして見るゆとり  
つばりの子に戸口すこし開けておく

花世  
亜也子  
野成

小さな目パバの秘密をママに告げ  
特売のチラシで今日の暮し立て

シマ子  
シマ子  
シマ子

夫から見れば妻いるだけのムード  
失言のいましめコヨリくくられる

野生  
野成  
野成

浮世絵のように艶めく雪柳  
歩いたらさつぱりムードのない男

野成  
野成  
野成

ほんわかムードに乗せられてきた挙式  
堂々と正門くぐって来るスパイ

野成  
野成  
野成

兎小屋明治の畳切り刻み  
なごやかなムードへ毒舌水をさし

野成  
野成  
野成

ポートピア故障の無い日は雨が降り  
芸術という名で画く腰の線

野成  
野成  
野成

失言がブラックジョークとして通り  
鶴の愚鈍亀の狂気をあこがれる

野成  
野成  
野成

失言の中に本音がかくれている  
失言が語録となって世に残り

野成  
野成  
野成

ピアノ弾く指十本の役どころ  
金魚一匹浮草とたわむれる

野成  
野成  
野成

鍵盤は今日の気分の彩で鳴る  
美女前に溜息ついているスパイ

野成  
野成  
野成

スパイにも朝すつきりと明けてくる  
青天の霹靂テニスなどと妻

凡九郎  
小路

うわついたムードに沈んでいく錨  
険悪なムードにふれぬ煙草の輪

千代子  
千代子

いくしま川柳会  
香水のきつい香りにむせかえり

紫香報  
紫香報

酒瓶の奥のごきぶり眼が赫い  
着るものにこだわる祖母でまだ若い

伊三郎  
伊三郎

噴水は心の起伏語っている  
縫い物を明日にまわして昼の夢

貞子  
貞子

唯一字愛と書かれた手帖持つ  
いたいた風鈴皆で振って聞き

晴子  
晴子

カラフルな園児の傘が朝をゆく  
椅子深く掛けて働く朝になる

唯夫  
唯夫

看病の疲れ捨場を探す妻  
雛ほどの胡瓜にちやんとイボがある

保蔵  
保蔵

傘持ったポーズ絵になる利久下駄  
置いていて安らぎがある薬箱

まき  
まき

石女が宝石箱を抱いて寝る  
下駄箱に亡父の疲れた靴がある

美智子  
美智子

警察手帖出すと無口になってしまう  
古い川柳女にふられた事がある

紫香  
紫香

死んだ気で働けなどと他人事  
満花の桜にコースタイムを狂わされ

比呂志  
比呂志

才能に自信過剰が仇となり  
針と糸旅へ女の身だしなみ

喜流  
喜流

遠廻りしても安全策を選び  
恋ナンテなんてハイミスよく食べる

与呂志  
与呂志

恋ナンテなんてハイミスよく食べる  
恋ナンテなんてハイミスよく食べる

六龍子  
六龍子

勝算の足元軽し梅雨晴れ間  
にぎりめしとにかく握る空模様

洛  
本蔭棒

財だけですまぬ家庭不和の波  
国訛り咎められてから無口

二天坊  
二天坊

無口だが根性がある太い眉  
弱身つて武器切札に蔵すたく

ひろ子  
ひろ子

武器捨てた平和を二度と離すまい  
やけ酒に己れの弱身さらけ出し

淳水  
淳水

負け犬になるやけ酒に残す悔い  
やけ酒へ店主黙って酌いで呉れ

喜醉  
喜醉

やけ酒と云うホロ苦い今日の酒  
やけ酒と云うホロ苦い今日の酒

笑風  
笑風

南海電鉄川柳部  
辻

圭水報  
圭水報

佳句地10選 (前月号から)

里 小路選

寝転んだ野原でしかと土に会う  
先生がまごつく程に若い母

田鶴子  
田鶴子

裏口を知らぬ夫の定期券  
ひよつこの面はずるさを許してる

桐下  
桐下

原っぱの風にやさしく犯される  
心配はするな自分以上に写らない

柳柚  
柳柚

職人が化ける背広を持つている  
小遣いを締められ小さい汚職する

文平  
文平

足跡をデンデン虫は振りむかず  
毒草の新芽もあしたを待っている

美幸  
美幸

毒草の新芽もあしたを待っている  
毒草の新芽もあしたを待っている

美幸  
美幸

補助金をきつちり費う年度末  
 補助金があるので云いたい事云えず  
 補助金へ甘え心のまだ残り  
 補助金をたよりにしてたつけが来る  
 補助金をあれもこれもと当てにされ  
 補助金は横領し易い金らしく  
 補助金で足の出ぬ様飲んで  
 補助金をつまみ喰いしてつけ回す  
 補助金が出ますと委員押しつける  
 補助金を役人上手に使分け  
 冒険を好む若人気がはすみ  
 冒険に歓声あげる宇宙船  
 好奇心湧くと冒険したくなる  
 子供等に冒険漫画人気あり  
 冒険がでますサラーマン守る  
 冒険な事はおよしと常に妻  
 成功で始めて冒険生きてくる  
 冒険を雄々しく乗り切り功果たす  
 知恵熱が下れば何か又おほえ

小松園 主水 勝美 宏子 維久子 信江 東雲 遊川 さよ 和重 川狂子 綾珠 ミツエ 白梅 雅風 儀一 すえお さゆり とし子 板尾 岳人報 浜子 花梢 美代 利重 正男 伊佐子 美江 美佐子 美津子 泰子 正信

金持ちと人に云われる身のつらさ  
 教室のガラスが割れたホームラン  
 教室に暴力つけて悲しませ  
 教室で人を愛すること習う  
 城北川柳会  
 草笛の太郎は橋にもつれない  
 優秀な孫の自慢に瞳が輝る  
 花菖蒲 色即是空 艶やかに  
 田の中で立てば仕事になる案山子  
 美智子妃の帽子高からず低からず  
 まん中に生れて損することばかり  
 群なせば可愛い鳩でもにくくなる  
 風鈴草 風に靡いて音立らず  
 しばらくは口で遊ばすサクランボ  
 継ぎ当てて着古す大正遠くなり  
 顔刺らす間は命預けます  
 夏の日に燃える若さがうらやましい  
 真ん中に主の重き位置があり  
 花菖蒲そぼふる雨に咲き乱れ  
 北風に耐えて二人を待つベンチ  
 応接間バラ三本に隙がない  
 出し惜しみます程でない知恵袋  
 人間にパンダも飽きて欠伸する  
 とるまでに切れた電話が気にかかる  
 蜘蛛が巣を北に向つて張り始め  
 川柳後楽  
 釣書に書けない疵を探される  
 初恋の古疵夢で疼きだし  
 疵物にふさいでくれる母が居り  
 疵物にふさいでくれる母が居り  
 見て見ない振りをして顔の疵

為之助 きはち 柳太 岳人 弘生報 はつ総 千世子 公一 忠夫 道子 登志代 ひろ子 炬斉 満津子 千子 利義 きくみ 捷一 星斗 美穂 右近 松太朗 ふみ 与呂志 鮫虎狼 玉平 幽谷 幸好

道連れは美人の方についていき  
 道連れの素振り誘惑かと思ひ  
 道連れの女を妻と間違われ  
 戻れない旅で道連れ置いて出る  
 道連れの旅合傘へ血が騒ぎ  
 道連れを選る釣書の慎重さ  
 見知らない道連れへまで嫁の愚痴  
 深入りをして悔まれる蟻地獄  
 おふくろにいわれて気付く深い仲  
 深入りを避ける女は丙午  
 つき合いの深き苦言も吐いてくれ  
 寂しげに落した肩に深い訳  
 おかんむりらしく話題が途切れる  
 こみ入った話へ嫁が除外され  
 話題には困らぬほどの世を渡り  
 川柳たけはら  
 句集編むときめき五月の風光る  
 地鎮祭聞こえてきそうな槌の音  
 春が好きレンゲの精に会えるから  
 エメラルドきれいな海のままがいい  
 妻が逝つて寡黙の鍵となり果てる  
 一歳の笑顔何にもかえがたし

兵庫東丹南町  
 平野百合子さんより  
 金婚を記念して  
 封  
 拝受致しました。  
 川柳塔社

佐加恵 博友 哲郎 草風 番茶 秋月 柳五郎 青銅 宏太 胡風 健夫 和一 照路 七面山 久米雄 静水 中三愛 小六紀 小四仁昭 かつこ 比呂子

瞳の中に暖めている友情  
 山畑のわたしも染まりそんな青  
 長女次女二十年後をふと想う  
 亀でよし息子よ後を振り向くな  
 お月様見つけた子の夢母の夢  
 いつ果てる旅か鏡の裏を見る  
 珍客へバイオリズムが狂い出す  
 人生の節目を思う契約書  
 待つという言葉に女ほだされる  
 家中の時計が今朝もみな動く  
 お先祖様拜んで今日が動き出す  
 病んでから生命線が気にかかり  
 甘えてるネコがかくしている爪よ  
 生きている証心の鈴が鳴る  
 風化が始まる（けらおとし）その日から  
 堺川柳会（五月旬会） 河内 天笑報

鈍舟 房蘭 節夫 笑子 不朽 里香 西居 酉合 一路 秀水 かつ子 こうじ のぼら 紫光  
 千万里 茂美 与呂志 君子 醉々 千代三 鶴丸 東雲 ミツエ かな女 弘生 静馬 元紀 宏子

人間の模様が出来る交叉点  
 調理師のエプロン憎たらしく白い  
 北国のれんげ明るい村にする  
 広告へ消費者だんだん狡くなり  
 おしぼりのあとで煙草を深く吸う  
 どんぐり川柳会 谷垣  
 ゴールインしたら墓場を探そうか  
 潮どきに女将はそっとお茶を出す  
 疑えば己の影も怖くなる  
 ゴールインその鼻の差にあるドラマ  
 疑うと明日が見えなくなってくる  
 妻の鈴疑う余地のない音色  
 強引に押すが引きどき知っている  
 完成はしたが汐どきまだ来ない  
 疑えばみな犯人に見えて来る  
 人生のゴールを飾る美辞麗句  
 疑いの糸はもつれて夜叉となる  
 潮どきは終り番台降りてくる  
 ゴールあるのか かつむりの歩み  
 潮どきと刑事がつぶやいた怖さ  
 汐どきと見た職業も落ちつかず  
 男のゴールは死ぬ時だと思ふ  
 人生の潮どき似合うルーブタイ  
 その中に少し怪しい老夫一等  
 疑いも疑われもせず老夫婦  
 汐どきは総会屋さえ待っている  
 咳払い増えて汐時だと思ふ  
 川柳堺（六月旬会） 河内  
 あのダンブおんな運転してるがな  
 塩断ちの女さびしい影をもち  
 塩からい涙都会の灯がにくい

天笑 凡九郎 一二三 左久良 素灯 史好報 健司 岳司 射月芳 一三三 美幸 真砂 一步 悦郎 瓢太 史江 吸江 醉々 好郎 薰風 儀一 鎮彦 千代三 憲祐 弘祐 雅風 柳伸 天笑 素灯

苦の種をわざわざ探しているベッド  
 平凡な女で盲点見つからぬ  
 塩味のような男で管理職  
 愛情というきびしい塩加減  
 生き残り金魚一匹もて余す  
 盲点をつかれ鏡を脱ぎ捨てる  
 運転手浮世の嘘になれた背な  
 乗ってから運転事故の体験談  
 運転手なくとも地球自転する  
 運動はお任せ下さい事故はゼロ  
 快適の運転新車の乗り心地  
 知りすぎていて盲点が判らない  
 出目金のユーモア見てる梅雨の午後  
 金魚ほど悟り切れない檻の猿  
 ふと見れば運転席に顔がない  
 喪服着た金魚ゆっくり動きだす  
 水に浮くほどの種からこんな花  
 オースケール川柳会 大坂 形水報

与呂志 千代三 眉水 鶴丸 健司 千万里 弘生 甘平 山久 軒太楼 柳宏子 美幸 度 東雲 薰風 秀川 光夫 米蔵 千夢 一念 公坊 野生 聖地 登 博泉 形水 入仙

## 本社八月句会

日時 八月七日(金) 午後六時  
会場 金属会館

南区鰻谷東之町10番地  
地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ  
電話 271・3935番

席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守	「急用」	小出 智子 選	兼題	おはなし
	「潮」	香川 酔々 選	「脇役」	黒川 紫香
	「絵」	西田 柳宏子 選	「急用」	小出 智子 選
		橘 高薫風 選	「潮」	香川 酔々 選

★投句は句箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

9月の兼題 「星座」 「手馴染み」

本社9月句会は7日(月)6時から

暑中お見舞い

申しあげます

川柳塔社 常任理事

参事	理事	句会部	編集部
一同	一同	一同	一同

## 募集

### 十月号発表 (8月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栗選  
水煙抄(10句) 正本 水客選  
愛染帖(3句) 橘 高薫風選  
課題吟(各題5句以内)

「先手」 本多 清人 選  
「粗品」 川崎 秋女 選  
「泡」 荻野 鮫虎狼 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

### 十一月号発表 (9月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栗選  
水煙抄(10句) 正本 水客選  
愛染帖(3句) 橘 高薫風選  
課題吟(各題5句以内)

「相談」 菊田 いさむ 選  
「仮面」 福田 保子 選  
「底」 川村 英輝 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限り、★用紙はなるべく柳箋を( )使用してください。

8月の常任理事会は3日5時から

定価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)  
一年分 六千三百円(送料共)

昭和五十六年七月二十五日印刷  
昭和五十六年八月一日発行

編集兼 中島 蓬太郎  
発行人 藤原 童心社

〒542 大阪市南区鰻谷中之町二(○)番地  
発行所 川柳塔社

電話(三六三)二二九八五番  
振替口座 大阪 三三三六八番  
三和銀行心齋橋支店  
普通預金口座番号 一〇二七八三

## 編集後記

★六月三十日は麻生霞乃先生の百日忌で、七月七日は、路郎先生の十七回忌。相次いで歳月も思いも過ぎ去る。

★中島生々庵主幹に呼ばれ、山陽新聞の柳壇の選評を担当しないかと相談を受けたのが六月下旬、急なことだった。

★路郎先生から一度不朽洞を覗かないかと誘いを受

け、初めて編集室へ伺ったのは、昭和三十三年十二月十七日だった。その時に頂戴した一冊が、二十八年十月十五日発行の句集「山陽川柳」で、二十四年十二月三十日の夕刊にデビューして以来十八回に亘る応募入選句の集大成だった。

★爾來四半世紀を経て、その柳壇の選評を担当することになり、感慨は殊更に深い。研鑽にこれ勉めますから生々庵主幹同様に岡山の川柳人大方のご支援をお願い申します。

★暑中見舞の広告のご協力深謝申あげます。時季は舊蒲から風鈴へ。 薫

★陰曆七月十六日夜（現在は8月16日）京都の如意獄の中腹で大の字形に火を焚く、いわゆる大文字焼きが盆の行事として行われる。奈良でも行われるが、京都の方が有名となっている。

京ではこの夜、他に「左大文字」、「妙法」、「船形」、「鳥居形」を他の山々で焚く。遠い死者の国から、先祖の魂を迎えかつ送り帰すた

めに焚く「盆の迎え火・送り火」の風習が、各地に残っている。死者の国と生前の国との間を往還する道

を、明るく照らす照明のためであろう。十七世紀後半の寛文・延宝年間から、現在のように、字画に沿って所々に薪を積み重ね、同時に点火するようにになったという。「薫風句集肉眼」より一句。大文字夢の多くは夢で終る。

★「アンソラセン」をご存知ですか。私が知ったのは書家の榊莫山氏著「文宝四宝・墨の話」を読んだから

のことである。奈良の古い墨屋さんが、菜種油等からススを採り、ニカワで固めて墨をつくる作業風景をテレビで見たことがあるが、そのススとは別に「生松松煙」がある。むかし吉野方面の深い山中で、松の幹に傷をつけて、流れてた松脂を燃してススを採っていたが、戦時中、資源愛護の面で軍から中止させられた。墨に魅せられた天満の鋼材屋、小川某氏が瓦斯会社のコールタルから「生松松煙」

たのしさひろがるお買物

阪急

に替る「アンソラセン」を発売し、八尾高安山の麓で生産に生涯をかけた。その未亡人小川喜美さんは八十歳になられ、川柳の投句には何時も墨書である。

★W「こんなことをいった奴がいる。美しい女の言うことはみんな嘘だが、唄う唄はみんな本当だ」

C「誰が言った」  
W「俺さ」

これは映画「悪の花園」でリチャード・ウィドマーとゲリー・ターバー

が酒場女の唄をききながらのやりとり。  
★こういう泣かせるせりふばかりを集めて、和田誠が「お楽しみはこれからだ」という本を書いている。ロッキングチェアにでも揺られながら読んでみると不快指数がふつとぶこと請け合

いだ。  
★その中からもう一つ。「あなたは今でも詩人？」

「本当の詩人になった。一行も書かないからね」  
★ほくも本当の川柳人になりかけたようだ。(史)

## 肉体疲労時のVB<sub>12</sub>補給に— アリナミンA

アリナミンA25の効能—肉体疲労時・病中病後・妊娠授乳期のビタミンB<sub>12</sub>補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、脚気、夜尿症、説明書をよく読んで正しくお使いください。☆くわしくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。  
武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27



暑中お見舞申し上げます

電波新聞社

東京本社

東京都品川区五反田二丁目二一―一五

大阪本社

大阪市北区中ノ島三 (朝日新聞ビル内)

投稿欄案内

川柳 選者 橋高薫風 (掲載日) 毎週水・土曜日

俳句 選者 小寺正三 (掲載日) 毎週火・金曜日

短歌 選者 佐々木信夫 (掲載日) 毎週月・木曜日

※優秀句には掲載紙をお送り致します。

《投稿規定》はがき一枚に三句(首)以内・自由課題。

《投稿先》〒530 大阪市北区中ノ島三 (朝日新聞ビル内)電波新聞大阪本社学芸部あて。

(川柳・俳句・短歌を明示)

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和五十六年七月二十五日 印刷  
昭和五十六年八月一日発行 (毎月一日発行)

創刊大正十三年 通巻六五二号 川柳塔 八月号

南紀 和歌山 四国でのお泊りは――

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉――忘れえぬ はまゆうの宿  
政府登録国際観光ホテル ホテルパシフィック

政府登録国際観光旅館 朝日

勝浦温泉――海に浮かぶパラダイス  
政府登録国際観光旅館 中の島

湯峰温泉――山のいで湯で山菜料理  
政府登録国際観光旅館 湯の峯荘

和歌山・新和歌浦――海岸美が楽しめる  
政府登録国際観光旅館 萬波

徳島・鳴門――うずしおの宿

政府登録国際観光旅館 鳴門

政府登録国際観光旅館 鳴門公園ホテル

紀北・橋本――ゴルフの宿で季節料理  
観光旅館 紀の川苑

大阪・泉南淡輪――魚つりに ゴルフに  
観光旅館 淡の輪苑

大阪・なんば――清楚で近代的なホテル  
ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社  
サービスチェーン大阪案内所  
☎06-631-0222



南海電鉄

定価 五百円 (送料五十円)